

遺跡

馬見二ノ谷遺跡

（北葛城郡河合町山坊）

平成十四年に馬見丘陵の北東端近くの試掘調査によって新たに発見された旧石器時代遺跡である。翌年にかけて発掘調査が行われ、およそ六千四百点にのぼる石器が出土した。

この石器群には、ナイフ形石器が約百四十点あり、それらの特徴はナイフ形石器が盛んにつくられた時期のうちでもより新しい段階（ナイフ形石器文化終末期）のものである可能性を示している。また、初めて発見された特徴的な石器があり、「馬見型尖頭器」と呼んでいる。調査後に現地は馬見丘陵公園の緑道エリアとなり、遺跡の内容を示す説明版も設置された。

鶴峯荘第一地点遺跡

（香芝市穴虫）

奈良盆地の西端、大阪との府県境に位置する二上山の周辺は、石器の材料に適したサヌカイト（讃岐岩）の産地として広く知られている。旧石器時代から弥生時代にかけて、非常に多くの遺

跡が残されていて、それらを総称して「二上山北麓遺跡群」と呼んでいる。

鶴峯荘第一地点遺跡は、桜ヶ丘第一地点遺跡などとともに二上山北麓遺跡群の中でも代表的な遺跡のひとつである。昭和五十九～六十年（一九八四～八五）に行われた発掘調査での出土資料には瀬戸内技法に関係する石器接合資料も多く含まれていて、瀬戸内技法の実体解明をより具体的に進める材料となっている。また、発掘調査ではサヌカイトを採掘したと考えられる土坑も発見されている。地表にあらわれたサヌカイトを採集するだけでなく、採掘するという活動が旧石器時代にすでに開始されていたことを示す貴重な資料である。

大川遺跡

（山辺郡山添村大川）

名張川の屈折する部分、左岸に広がる河岸段丘上に立地する縄文時代遺跡である。遺構には早期前葉と後期前葉のものとがあり、後期では中央に炉をもつ竪穴住居跡が一基ある程度だが、早期では竪穴住居跡三基のほか、集石炉と考えられる遺構十一基、土器を横たえた土坑などが検出されている。土器は「大川式」のほか、早期前半の押型文土器がひと通り揃っている。石器は尖

頭器、石鏃、石錐、スクレイパー、石匙のほか、石斧、石錘、磨石、凹石、石皿などがあり、特に滑石製のケツ状耳飾は、前期に特徴的な装身具である。

遺跡は国指定史跡とされ、公園整備が進められており、遺物は山添村歴史民俗資料館、橿原考古学研究所附属博物館、同志社大学歴史資料館に展示されている。

橿原遺跡

（橿原市畝傍町・御坊町）

畝傍山東麓を南北に流れる桜川が形成した微高地上に立地する。昭和十三年（一九三八）の橿原神宮整備事業に伴う大規模な発掘調査により全貌が明らかとされ、微高地をはさんだ東西の低湿地に細長くのびる包含層から、縄文時代後期から晩期にかけての大量の遺物が出土した。

遺構には石囲炉、柱穴と思われるピットや、杭群など居住関連のものがあるほか、屈葬人骨も検出されている。土器は後期後葉から晩期後葉にかけてのものが確認される。ここで多く出土した七宝形文様を陽刻する浅鉢形土器は、「橿原式」と呼称され著名であるほか、他地域の土器が多いのもこの遺跡の大きな特徴で、特に東北地方

の亀ヶ岡式土器の豊富さは、西日本ではほかに例を見ない。土偶も百九十六点と西日本随一の量を誇る。石器、石製品、鹿角製品、それに動植物遺存体も豊富であつて、西日本には比類すべきものがない。

遺物は重要文化財に指定されており、橿原考古学研究所附属博物館に展示されている。

宮滝遺跡

(吉野郡吉野町宮滝)

大きく蛇行する吉野川右岸に形成された南面する河岸段丘上に立地する。遺跡の範囲は、東西約三〇〇^{メートル}、南北約七〇^{メートル}〜一三〇^{メートル}と推定される。縄文・弥生・古代の複合遺跡で、天武・持統・聖武朝の吉野離宮跡に比定され、遺跡の一部は国史跡に指定されている。

昭和五年(一九三〇)より行われた「吉野離宮」解明に関する発掘調査の結果、段丘西南部の飛鳥・奈良時代の敷石遺構下層において、縄文時代後期から晩期にかけての遺構、遺物が確認され、以来、現在まで断続的に調査が行われている。遺構はあまり顕著でないものの、川原石が配された中に焼けた獣骨や人骨が集中して出土する遺構があり、後・晩期によくある火を伴った埋葬行為に関する遺構ではないかと考えられ

ている。また、近年では早期の集石遺構も確認されている。土器は早期、中期末から晩期にかけてのものが認められるものの、本遺跡出土資料を標式とし、「宮滝式」と呼称される巻貝施文の凹線文土器が量も多く著名である。石器には生業に伴うと考えられる実用品のほか、祭祀に関連すると思われるものが含まれる。

弥生時代の遺構としては、前・中期の土器棺墓、中期の掘立柱建物一棟、竪穴住居址十棟、方形周溝墓十基・木棺墓五基などがある。出土遺物には、弥生土器・石鏃・石剣・石槍・石錐・石斧・打製石鏃・磨石などがある。

出土遺物の一部は、橿原考古学研究所附属博物館と吉野歴史資料館に展示されている。

唐古・鍵遺跡

(磯城郡田原本町唐古・鍵)

寺川と初瀬川に挟まれた標高四七^{メートル}〜四九^{メートル}の沖積地上に立地する。遺跡の範囲は、南北約八〇〇^{メートル}、東西約六五〇^{メートル}、面積約三〇万平方^{メートル}と推定され、弥生時代前期から後期まで継続する国内屈指の弥生時代集落跡および墓域である。集落は直径約四〇〇^{メートル}の大環濠で囲まれ、その外側に三[〜]五条の多重環濠が巡っている。環濠帯の幅は、一五〇^{メートル}〜二〇〇^{メートル}がある。特筆すべ

き遺構の一つに二棟の大型掘立柱建物があり、その柱穴内からは、直径約六〇^{センチメートル}の櫓製の柱が出土した。また特筆する遺物として、銅鐸鑄型をはじめとする青銅器鑄造関連遺物や硬玉製の大型勾玉・管玉、鞘入り石剣、約二百五十点の絵画土器などがある。

唐古池を含む遺跡の一部が国史跡に指定され、「楼閣絵画」の復原建物が建てられている。出土遺物の一部は、橿原考古学研究所附属博物館と田原本町の唐古・鍵考古学ミュージアムに展示されている。

總向遺跡

(桜井市)

三輪山の北西に位置する東西二^{キロメートル}、南北一^{キロメートル}におよぶ三、四世紀頃の遺跡である。遺跡は広大であるが環濠は見られず遺構は扇状地に延びる流路にはさまれた各微高地上に広がっている。遺跡中枢部の内容はまだ不明だが、主な遺構には矢板を持つ長大な溝や各種の土坑・掘立柱建物跡、導水施設などがある。墳墓としては方形周溝墓、木棺・土器棺墓のほか遺跡内所在の纏向古墳群・箸墓古墳の存在も重要である。出土遺物も多彩で日本各地域との交流を示す多量の搬入土器や祭祀関連・建築材などの木製

品、銅鐸・特殊埴輪片や組帯・弧文を刻す遺物が出土しているが朝鮮陶質土器を伴う鍛冶遺物の存在も注意される。遺跡の規模と内容から大和政権成立時の宮都の可能性が高く、考古学的に古代国家の出現過程を最もよく示す遺跡として重要である。また古典にいう「景行天皇纏向日代宮」「垂仁天皇纏向珠城宮」との関係も考慮される。なお一部では邪馬台国説もある。

上之宮遺跡

(桜井市上之宮)

阿部丘陵の西端、寺川の左岸にある古墳時代後期から飛鳥時代の遺跡である。発掘調査で掘立柱建物十四棟、柵列八条、石溝二条、竪穴住居跡三棟などのほか、石敷き・苑池遺構が明らかになった。遺構の中心時期は古墳時代末期から飛鳥時代初めで、その頃に大型建物とその西に苑池遺構などが築かれている。大型建物は東面する四面庇の正殿風建物で、柵で囲まれており、東西一辺、南北一三辺の規模で建替が行われている。これに隣接する苑池遺構は一〇辺×六辺の範囲で排水溝を持つ石組みとそれを円形に巡る石溝などから成り、さらに直線に延びる石溝に連なるといふ例のないものである。ここからは木簡、ベッコウ、琴柱、横櫓、ガラス玉の鋳型

などの特徴的な遺物が出土している。また大型建物北側の石敷き遺構からは和同開珎が出土。この遺跡については聖徳太子の上宮とする説がある。

南郷遺跡群

(御所市南郷・佐田・井戸・下茶屋・多田・極楽寺・林)

金剛山東麓の広い範囲におよぶ集落遺跡。古墳時代中期(五世紀)に盛期があり、古代の豪族葛城氏の活動拠点の一つであったと考えられる。

丘陵頂部を中心に様々な性格をもつ遺跡がある。渡来系生産工人などが居住した一般集落(下茶屋カマ田遺跡・林遺跡など)、武器や銀製品などを生産した特殊工房(南郷角田遺跡)、生産工人層を統括した渡来人の屋敷地(南郷柳原遺跡)、大規模倉庫群(井戸大田台遺跡)、大規模な導水施設(南郷大東遺跡)、大型の「祭殿」(南郷安田遺跡)などがある。

平成十七年に調査された極楽寺ヒビキ遺跡も遺跡群の範囲に含まれると考えられる。極楽寺ヒビキ遺跡では、石垣に囲まれた広い区画の中に、宮山古墳で出土した大型家形埴輪のような巨大な建物が建てられていたと考えられている。『日本書紀』には葛城氏が渡来人を中心に四邑

(高宮・桑原・忍海・佐麿)を造ったという記載があり、この記載に関わる集落と考えられる。

近代化遺産

近代化遺産とは江戸時代からおおよそ今から五十年前までに作られた、我が国の近代化を支えた産業、土木などの建築物や構造物、設備、各種機械類のことをいう。

近代化の旗手です。まず思い起こされるのは鉄道である。奈良県において見ると、鉄道の敷設は観光地への利便性や神社仏閣への参詣を目的とした観光的、宗教的要素を特色とする。奈良県の鉄道の歴史は、明治二十三年（一八九〇）十二月二十七日、大阪鉄道により奈良・王寺間（現JR関西本線の一部）が開通したことに始まる。以来、県北の盆地を中心に鉄道網は広がっていくのである。現在の路線数は旧国鉄のJR線が三線、近鉄線が十二線（鋼索線を含む）。

JR奈良駅旧駅舎

（奈良市三条本町）

明治二十三年（一八九〇）十二月二十七日開業の奈良駅は、昭和九年（一九三四）に改築された際、屋根の上に「相輪」が取り付けられるな

ど奈良の玄関にふさわしい寺院のような姿の駅舎になった。駅周辺の高架化事業により解体撤去が心配されたが、移設保存されることとなった。

大仏鉄道

明治三十年代に開通し、十年足らずで廃止された関西鉄道加茂・奈良間の路線を、通称「大仏鉄道」と呼ぶ。明治三十一年（一八九八）四月十九日に関西本線の前身である関西鉄道が、名古屋方面からの大仏参詣を主とする奈良への観光客誘致を目的に、加茂駅（京都府木津川市）から大仏駅（奈良市法蓮町）まで開業。翌三十二年五月二十一日に奈良駅まで乗り入れを果たす。しかし途中区間の黒髪山や鹿背山あたりの勾配が急であることや、木津駅を経由する現在のルートが完成したため、明治四十年（一九〇七）に廃止された。奈良市法蓮町の旧大仏停車場跡の南端付近は公園として整備され、モニュメントが設置されている。

近鉄生駒鋼索線

（生駒市）

日本最初の営業用鋼索線（ケーブルカー）として、大正七年（一九一八）八月二十九日、生駒

鋼索鉄道により鳥居前・宝山寺間が開業。生駒聖天と呼ばれる宝山寺参詣の足となる。大正十一年に大阪電気軌道と合併。昭和元年（一九二六）には鋼索線としては非常に珍しく複線化される。昭和四年（一九二九）には生駒山上に開園した遊園地への足として、宝山寺・生駒山上間が開業した。両駅間に梅屋敷、霞ヶ丘の二駅があり、途中駅がある鋼索線もまた珍しい。

生駒山上遊園地

（生駒市菜畑町）

大阪と奈良を隔てる標高六四二メートルの生駒山上に昭和四年（一九二九）開園の遊園地がある。近鉄生駒鋼索線生駒山上駅から園内に足を運ぶと、天空に突き出た高さ四〇メートルの飛行塔が目飛び込んでくる。「日本の大型遊戯機械の父」と呼ばれた土井万蔵氏の作であり、昭和四年に建造され、現存する機器としては日本最古の大型遊戯機械である。生駒山上は軍事教練施設もあり、飛行塔は防空監視所に使われていた。そのため第二次大戦中における金属供出の対象から免れ、今なお建造当初の姿を保っている。

開運橋

（生駒郡三郷町信貴山西・南畑、平群町信貴山）

信貴山門前的大门池に架かる全長一〇六^{メートル}の鋼製橋。親柱には「昭和六年十二月竣工」と刻まれている。橋の形式は「上路カンチレバー橋」とい、他の例として長野県佐久市の千曲川に架かる昭和七年（一九三二）完成の「中津橋」がある。戦前の上路カンチレバー橋はほとんど例が無く、同形式としては最古の現存例である。

長尾街道道標

（香芝市田尻）

奈良と大阪を結ぶ街道の一つに長尾街道がある。堺市から南河内の北部を経由し奈良に至るものである。府県境となる大阪府柏原市から明治十三年（一八八〇）に新たに開削された長尾街道を辿り奈良県内に入ると、高さは三^{メートル}を超えようかと思われる道標（石柱）が現れる。各面には次のように記されている。「従是東 奈良縣管轄」「距奈良市橋本町元標 八里三町五十五間 距奈良縣北葛城郡役所 二里二十六町二十五間 距奈良縣北葛城郡高田町元標 二里三十五町十三間」「従是東 大和國北葛城郡二上村大字田尻」「大正九年三月建 奈良縣」

近鉄吉野線薬水拱橋

（吉野郡大淀町）

近鉄吉野線薬水・福神間の薬水川に架かるレン

ガ造りのアーチ橋（拱橋）であり、道路と薬水川を二連のアーチが跨ぐ。大正元年（一九一二）十月二十五日に開業した吉野輕便鉄道が建設した。谷間の集落にこのような重厚な煉瓦構造物が存在することに驚かされるとともに、「薬水門」と記された扁額が歴史の重みを感じさせる。

近鉄吉野線吉野川橋梁

（吉野郡吉野町）

近鉄吉野線の大和上市・吉野神宮間の吉野川に架かるトラスとガーダーが混成する橋梁。長さは二四二^{メートル}。開通は昭和三年（一九二八）三月二十五日。吉野川の清らかな川面に単線上路プラットトラスを電車が走る姿が映るのは何とも格別である。

吉野ロープウェイ

（吉野郡吉野町吉野山）

桜、新緑、紅葉、雪と四季折々の表情が私たちの目を楽しませてくれる吉野山。近鉄吉野線の終着、吉野駅の改札を出て駅前広場を抜けると千本口駅はすぐ正面。バス事業も行う吉野大峯ケーブル自動車経営する吉野ロープウェイは、昭和四年（一九二九）三月十二日の開業で、国内では現役最古のロープウェイである。吉野山駅までの距離は三四六^{メートル}、高低差は一〇一^{メートル}で、

約三分間の空中散歩が楽しめる。

谷瀬の吊り橋

（吉野郡十津川村上野地）

昭和二十九年（一九五四）に架橋された長さ二九七^{メートル}、川面からの高さ五四^{メートル}を測る吊り橋。観光名所としても名高く、スリルを味わいに訪れる観光客は跡を絶たない。

国宝の仏像

◎東大寺

法華堂の諸像

中尊の不空羂索観音立像は、三目八臂の姿で、中尊としての威厳がただよう。正面を向いて蓮華座上に直立し、胸前の合掌手を中心に各左右三手がバランスよく配され、充実した体軀には安定感がある。制作時期には諸説があるが、八世紀中頃までには完成していたものと考えられる。

不空羂索観音の向かつて右に立つ梵天と、左の帝釈天は、古代インドの神が仏教の守護神となったもの。梵天は大衣の下に甲を着け手に経巻を持ち、帝釈天は胸元のあいた寛衣と呼ぶゆつたりとした衣を着けるが、本来は武装神である帝釈天が甲を着けるのが通例であることから、当初は尊名が逆であった可能性がある。

梵天・帝釈天の前方内側に立つ金剛力士像は、上半身裸形のいわゆる力士形の姿をとらない着甲の神将形金剛力士の数少ない遺例である。

須弥壇の四隅に安置される四天王立像は、持国・増長天が戟、広目天が筆と巻子、多聞天が戟と塔（亡失）を執り、それぞれ皮甲に身を包み邪鬼を踏まえて立つ。

不空羂索観音像のすぐ横、向かつて右が伝日光菩薩像、左が伝月光菩薩像である。表面は彩色して仕上げるが、一部には切金文様も見られる。前述の乾漆造と同様、八世紀半ばごろまでには造像されたものであろう。

法華堂塑造執金剛神立像と開山堂木造良弁僧正坐像

法華堂の不空羂索観音像背後の厨子内に北面して安置される執金剛神立像は、良弁僧正の念持仏であつたとも伝えられており、年に一度、十二月十六日の良弁忌の日のみ開扉される。永く秘仏として伝来したため、表面の彩色や金箔もよく残る。

なお、この良弁忌には、二月堂の向かいにある木造良弁僧正坐像を祀る開山堂の厨子も開扉される。檜の一木造で、当初の彩色が残る。寛仁三年（一〇一九）、僧正堂（開山堂）で初めて良弁の遠忌法要が修されたといい、この時までには造立されたものと見られる。

戒壇堂の塑造四天王立像

大仏殿西方の戒壇堂の須弥壇四方に安置される四天王立像は、法華堂の諸像と並ぶ天平彫刻の代表作。持国天は刀、増長天は戟、広目天は巻子と筆、多聞天は塔と宝棒を持つが、増長天の左手と多聞天の右手を除いて各像の手首先と持物は明治時代の後補である。塑造で瞳に黒い石を嵌め込んでいる。

南大門の木造金剛力士立像と鎌倉復興期の仏像

南大門の左右に立ち、東大寺を守護する巨大な金剛力士立像（仁王）は、大仏殿に向かつて右が吽形像。眉を吊り上げて目を大きく見開き、口をへの字に閉め、右手を上げて左手に金剛杵を執る。一方の阿形像は、右手は腰横で金剛杵をたてて持ち、左手は屈臂して掌をいつぱいに開く。造立は、当時慶派仏所を主宰し、中心的存在の運慶が全体を監督する総仏師となり、阿形像はベテラン快慶が主導、吽形像は運慶が積極的に関わったとする理解が有力である。

僧形八幡神坐像は、文字通り僧の姿をとった八幡神像で、衣の上に袈裟を着け、右手に錫杖、左手には数珠を執る。像内には一面に丹が塗ら

れ、そこに墨書で建仁元年（一二〇一）に快慶が小仏師二十八人らを率いて造立した旨と、土御門天皇、後鳥羽院をはじめ多くの結縁者が列記されている。檜材の寄木造。表面の彩色や持物、光背、台座に至るまで当初のもの。明治の神仏分離の際に手向山八幡宮から移され、現在は勸進所八幡殿に安置、毎年十月五日に開扉される。

俊乗堂の中央厨子内に安置される**俊乗上人坐像**は、鎌倉復興の功労者俊乗房重源上人の肖像である。上人は、建永元年（一二〇六）六月、東大寺の浄土堂で八十六歳の生涯を閉じた。本像を生前の造像とする説もあるが、やはり没後まもなく上人の追善供養のために造られたのであろう。

◎興福寺

国宝館の乾漆八部衆・十大弟子立像

本来は激烈な性格を持っていた異神であるにもかかわらず、この**八部衆像**は総じて静謐で気品のある姿に仕上げられている。中でも特によく知られ人々を魅了するのは三面六臂の阿修羅像であろう。

十大弟子像は、うち現在六体が興福寺に現存する。八部衆・十大弟子立像ともに、脱活乾漆の技法による。麻布を漆で塗り固めて張り子状の像を造り、中に心木を入れて固定、表面は木屎漆を盛り上げて整形し、彩色を施して仕上げる。

国宝館の仏像

中央に安置されるのは、もと食堂の本尊**千手観音立像**で、南都焼討ち後の復興像。檜の寄木造、漆箔仕上げ、眼には玉眼を入れる。養和元年（一一八一）、慶派仏師の成朝に造立が委ねられたが、完成は像内納入品の銘記から安貞二年（一二二八）ごろと推定される。

写実的な風貌で人目を引く**法相六祖坐像**は、法相宗にゆかりある六人の祖師の肖像彫刻である。檜材の寄木造、彩色仕上げ。文治四年（一一八八）から翌年にかけて、康慶が中心となって造立したものである。

特徴的な姿の**天燈鬼・龍燈鬼立像**も鎌倉時代の復興像で、運慶の三男康弁の作。檜材の寄木造、玉眼。表面は天燈鬼が朱色、龍燈鬼は対照的に緑に彩色されていた。また、龍燈鬼の眉は銅板を切断して造り、牙は水晶、竜の背鰭は革製。

旧西金堂安置の鎌倉復興像としては、さらに阿吽一對の**金剛力士立像**がある。檜材の寄木造、玉眼、彩色仕上げ。上半身と下半身を全く別に制作する。定慶作と伝わるが確証はない。

板彫十二神将立像は、檜の板に浮彫りで神将像を表しており、その形状から推して、本来は薬師如来像の台座側面に貼り付けられていたとも考えられる。制作は十一世紀頃と考えられている。

国宝館の仏像中、唯一の白鳳仏が**銅造仏頭**である。もともとは興福寺の仏像ではなく、山田寺の講堂に祀られていた。南都焼討ち後、諸堂・諸仏の復興が進む中で、東金堂の造仏が進捗しないことに業を煮やした堂衆たちが、文治三年（一一八七）に山田寺講堂から丈六の銅造薬師三尊像を奪取し東金堂の本尊として移安した。その後、応永十八年（一四一一）、東金堂が再び落雷で焼失した際に、本尊は頭部のみが灰中から救い出され、新たに鑄造された現本尊像の台座の内部に秘されるように納置された。この頭部が昭和十二年（一九三七）、堂の解体修理時に約五百年ぶりに、まさに劇的に発見されたのである。

東金堂の仏像

薬師三尊の両脇に安置される**文殊菩薩坐像**と**維摩居士坐像**は、いずれも檜の寄木造、玉眼、彩色仕上げの像。維摩像の像内に、建久七年（一一九六）に仏師定慶が五十三日をかけて彫刻し、法橋幸円が彩色に五十日を費やして七月五日に供養された旨が記される。

また、薬師如来の眷属として造られた**十二神将立像**は、いずれも甲に身を包んだ武装形であるが、忿怒の表情や武器を持つ姿勢も様々に表現されている。檜材を用いた寄木造の像で、おおむね左右二材を寄せて根幹部を造り、手などの突出部に別材を矧ぎ、表面に彩色を施して仕上げている。波夷羅像の沓底に、建永二年（一二〇七）に彩色を終えた旨の墨書があり、ほぼこのころに一組の群像として完成されたのであろう。作風からみても定慶が制作に関与した可能性が高い。

須弥壇の四隅に安置される**四天王立像**は、平安時代に遡る古像で、火災などで当初像の亡失後、ほかから移安されたものであろう。邪鬼や岩座も含めた像の根幹を檜の一木で彫出しているが、細部は木屎漆を用いて丁寧に塑形しており、天衣も鉄心に麻布を張り固めて造るなど、いわ

ゆる乾漆技法も併用している。奈良時代の技法をなお踏襲した九世紀の造像と考えられる。

南円堂の仏像

西国三十三ヶ所観音霊場としても篤く信仰が寄せられる本尊**不空羂索観音像**は、治承四年（一一八〇）の兵火後の諸堂・諸仏の復興造営の中で、仏師康慶によって制作された。檜材の寄木造、漆箔仕上げ。

四天王立像は、やはり鎌倉時代に慶派によって制作された像である。桂材の寄木造で、眼は彫眼。表面は彩色仕上げ。

北円堂の仏像

本尊**弥勒仏坐像**は、右手を屈臂して掌を前に向けて立て、第一・二指を捻り、左手は膝上近くで掌を上に向ける。桂材の寄木造で、腕の一部や脚部は檜。表面は漆箔仕上げ。像内には厨子に納めた弥勒菩薩像や願文・經典・心月輪などが籠められており、また台座に記された墨書銘からは北円堂安置諸像の造像背景が知られる。それによれば弥勒像は源慶と静慶（運慶の弟子）、脇侍像は運覚（同）、四天王像は湛慶・康運・康弁・康勝（運慶の長男から四男）、無著像は運助

（六男）、世親像は運賀（五男）が担当し、運慶工房あげて造像が進められたことがわかる。願文に建暦二年（一一二二）の年紀があるところから、このころに完成したものと推定される。

わが国肖像彫刻の傑作と評される**無著像**と**世親像**は四世紀頃の、北インドの兄弟の学僧で、宗派を越えて崇敬されている。本尊と同様に桂材を用い、無著像は頭体幹部を一材、世親像は前後二材から彫出している。眼には玉眼を嵌入する。

現在、北円堂に安置されている**四天王立像**は、運慶工房とは全く異なり、持国天と増長天の台座に記された弘安八年（一二八五）の修理銘から、延暦十年（七九一）に造像された、もと大安寺の像であったことがわかる。

◎薬師寺

金堂の銅造薬師三尊像

金堂の本尊薬師三尊像は、中央の**薬師如来坐像**の向かって右に**日光菩薩像**、左に**月光菩薩像**が随侍する。中尊は、漢字の「宣」に似た宣字形台座に座し、裳が台座から下へ大きく垂れる。薬師如来像であるが、薬壺を持たないのは、飛鳥時

代の法隆寺金堂薬師像をはじめ、天平時代までの像にはよく見られる。銅造で当初は全面に鍍金が施されていた。光背は江戸時代の補作。制作時期は、藤原京の薬師寺本尊が、養老二年（七一八）、寺の平城京移転に伴って移されたとする「移坐説」と、移転に際し新たに造立されたとする「新鑄説」とに分かれ、さらに移坐説には『日本書紀』の記載から持統二年（六八八）までに完成していたと見る説と、同十一年（六九七）に開眼された像と見る説などがある。

東院堂の銅造聖観音菩薩立像

東院堂の本尊聖観音菩薩立像は、頭体のバランスや体軀の抑揚など新しい表現とともに、飛鳥彫刻の伝統も残す。制作時期は、東院堂が創建された養老年間（七一七～七二四）におく説や、七世紀後半から八世紀前半の頃と考える説などがある。

◎唐招提寺

金堂の仏像

金堂には三軀の大きな仏像と守護神の梵天・帝釈天・四天王像が安置される。中央の盧舎那

仏坐像は、中尊にふさわしい量感に富む姿で、顔は引き締まった豊かな頬に、厳格な目鼻立ちを表す。脱活乾漆造で、台座蓮弁の間から天平神護元年（七六五）に初めて鑄された「神功開宝」が発見されたことから、制作は八世紀後半と考えられ、鑑真和上の弟子義静が関与したとも伝えられる。

中尊の向かつて右に立つ薬師如来立像は、前方やや下を見据え、右手を胸横にあげ、左手を下げて掌を前に向け、薬壺は持たない。木心乾漆造で、表面は漆箔仕上げ。

左側の千手観音立像は、頭上に十面、額に一眼を加えて三眼、手は大手四十二本の間に小脇手（九百五十三本が現存）を入れて文字通り千手とし、まさしく仏の偉容を示した像である。

中尊の両脇に配される守護神は、向かつて右が梵天、左が帝釈天である。表現は、中尊の盧舎那仏に通じるところが多く、ほぼ同時期かわずかに遅れたころの造像と思われる。頭体の根幹部は両袖を含んで一材から彫出し、表面は乾漆を盛って成形するほか、細部の表現や修正にも乾漆が多用されている。

須弥壇の四隅に配される四天王立像は、いずれも太造りのがっしりした体軀で、衣を着けた上

に甲で身を固め、下半身には裳を着け、岩座に立つ。梵天・帝釈天と同様、頭体幹部を一材から造り、細部に乾漆を使う造像法で、表現も梵天・帝釈天とよく似ている。

御影堂の乾漆鑑真和上坐像

境内東北隅の御影堂には、唐招提寺を開いた鑑真和上坐像が安置されている。眼を静かに閉じて手を腹前で組み、ゆつたりと座して瞑想する姿で、目鼻立ちはもとより、眼窩のくぼみや頭の微妙な肉付きまで、師の姿そのままに表現されている。脱活乾漆造で、内部には木枠がはめ込まれ、表面には彩色が施されている。わが国肖像彫刻の傑作である。

◎法隆寺

金堂の諸仏

中の間の銅造釈迦如来および両脇侍像は、大きな舟形（あるいは蓮弁形）の光背を背にした三尊像。台座は宣字形台座である。

本尊・脇侍ともに金銅造。光背の裏面には、聖徳太子の母間人皇后が崩じた翌年、太子とお后が相次いで病床に倒れ、そこで王后・王子等は諸

臣とともに太子等身の釈迦像を造立して転病延寿を願ったが、お后と太子が相次いで薨去、止利仏師によって像が完成したのは推古天皇三十一年（六二三）であった旨の刻銘がある。

東の間に安置される**薬師如来像**は、施無畏・与願印に結んだ手、厚手の衣を台座に垂らす懸裳の形式など、中尊の釈迦如来像とよく似ている。光背裏面に刻銘があり、聖徳太子の父用明天皇が自らの病氣平癒のため発願したが、ほどなく崩御されたため、推古天皇十五年（六〇七）に推古天皇と聖徳太子が寺と像を完成させた旨を伝えている。

四隅に安置される**四天王立像**は、持国天と増長天が剣と戟、広目天が筆と巻子（巻物）、多聞天が宝塔と戟を持つ。樟一木から彫出されており、七世紀の半ば頃に造られたとみられる。**毘沙門天と吉祥天立像**は、平安時代の承暦二年（一〇七八）に、金堂で「吉祥悔過」という法会を行うにあたり造られた像。両像ともに檜の割矧ぎ造で、表面は彩色や金箔・切金文様で飾っている。温和な作風は、平安時代後半期の特色である。

五重塔の塔本塑像

法隆寺五重塔の初重の四方には、各面に山岳

（須弥山）を背景として塑像の群像が配され、仏教の伝記に因んだ場面が立体的に表現されている。東面を「維摩詰像土」、北面を「涅槃像土」、西面を「分舍利仏土」、南面を「弥勒仏像土」と呼び、和銅四年（七一）の造立とする。なお、西面と南面は後世の修理の跡が多く、特に南面は弥勒仏以外は後世の補作である。

大講堂・上御堂・西円堂の仏像

大講堂安置の**薬師如来坐像**と脇侍の**日光・月光菩薩坐像**は、大講堂が再建された承暦元年（九九〇）頃に造立されたと考えられる。中尊は、薬壺を持つ通形の薬師坐像で、脇侍の日光・月光菩薩像はそれぞれ外側の手を上げる。構造は、中尊が頭体幹部を一材で造る一木造、脇侍は左右二材を中央で矧いで根幹材とする寄木造で、表面はいずれも漆箔仕上げ。

上御堂の**釈迦如来坐像**および**両脇侍坐像**も量感豊かな仏像。構造は、中尊・脇侍ともに桜材の一木造。作風から十世紀前半ごろの造像と考えられる。

西円堂の本尊は、左手に薬壺を持つ丈六の**薬師如来坐像**で、「峰薬師」と呼ばれる。脱活乾漆造で、漆箔仕上げ。台座は八角形の裳懸蓮華座。

千仏を付ける光背の大部分は鎌倉時代の補作である。重量感の増した体軀や厳しさの漂う顔貌表現から八世紀後半の造像と考えられている。

大宝蔵院（百済観音堂）の国宝仏

百済観音の名で有名な観音菩薩立像は、八等身に近い細身の姿が印象的。造像の時期には諸説あるが、おおむね七世紀半ば前後であろう。頭体の根幹部を台座の一部をも含んで樟の一木から造るが、表面にはさらに木屎漆（乾漆）を盛り上げて造形を加えている。

光明皇后の母（橘三千代）の念持仏と伝える**阿弥陀如来**及び**両脇侍像**は、記録によると往時は玉虫厨子とともに金堂に安置されていたらしい。中尊は渦巻状の螺髪を表し、頬がふつくと張った円満の相で、ゆつたりと結跏趺坐する。厨子は、台脚・須弥座の上に、扉を備えた本体部を置き、さらに屋根状の天蓋を載せている。仏像と厨子ともに七世紀末から八世紀初めごろの制作と考えられる。

夢違観音として親しまれる観音菩薩立像も七世紀後半の白鳳時代の金銅仏。この像に祈れば不吉な夢を善夢に転じてくれるという。

観音菩薩立像（九面観音）は、本面と頭上に八

面を戴く姿で、十一面観音を意識して造像されたもの。この像のような白檀材のもつ緻密な木肌を活かした像を檀像と呼ぶ。盛唐期の中国・唐で造像、わが国にもたらされたもので、鎌倉時代には法隆寺にあったことが文献より知られる。

地藏菩薩立像は、桜井市の聖林寺に伝わる乾漆十一面観音像とともに大神神社の神宮寺であつた大御輪寺に祀られていたが、神仏分離政策によつて、明治六年（一八七三）、金堂に移安されたという。檜の一木造。がつしりとした重量感のある体軀、太い衣文線は平安初期一木彫像の特色である。

聖霊院の木造聖徳太子坐像

聖徳太子像は、四十五歳の時に「勝鬘經」を講讃した時の姿とされ、わずかに口を開け、目尻をやや上げた精悍な顔立ちを見せ、正面で笏を執る。檜の割矧ぎ造と思われ、像内には漆を塗布し、底板の上に法華經・維摩經・勝鬘經を籠めた三連形の容器を納置し、さらにこの上には、亀の背上に自然木で造つた蓬萊山を備え、天平時代の銅造観音菩薩像を安置している。

侍者の**山背王・殖栗王・卒末呂王・惠慈法師坐像**は、東室の南側の一部が聖霊院となつた保安

二年（一一二一）に造像されたと考えられ、惠慈法師の持つ柄香炉を除いて持物も当初のものが伝わり、その入念な造りは平安工芸の貴重な作例でもある。

夢殿の救世観音像

夢殿の本尊観音菩薩像は、**救世観音**の名で呼ばれ尊崇を集めてきた。樟の一材から頭体の根幹部を彫出、表面には金箔を押している。精細な唐草文を透彫りした金銅製の宝冠は、要所に紺色のガラス玉を飾る。奈良時代後半には、すでに上宮王（聖徳太子）と等身の木造観音像と伝えられ、やがて秘仏となつたが、明治十七年（一八八四）に岡倉天心とフェノロサによつて厨子が開扉され、その姿が再び現れた。

行信僧都坐像は、太子ゆかりの斑鳩宮の跡地に夢殿を中心とする東院伽藍を造営・整備した僧の肖像。脱活乾漆造で、目鼻などの細部や衣褶の起伏は、木屎漆を盛り上げて巧みに造形している。

道詮律師坐像は塑造による彫像。道詮は法隆寺の僧で、聖徳太子を崇敬し、荒廃した東院伽藍を修理するため貞観元年（八五九）頃から尽力した。道詮の没年は貞観十五年（八七三）と伝

えられており、本像の制作もほぼその頃であろう。

◎その他の寺院

（新薬師寺）

木造薬師如来坐像と塑造十二神将立像

薬師如来像は、左手を膝上に安んじて薬壺を持つ。頭体幹部は榎の一木造。手や膝前部などに別材を矧ぐが、これらも基本的に縦材を用いている。制作時期は、八世紀後半から九世紀初頭の間でいくつかの説がある。

十二神将立像は薬師如来の眷属であるが、本尊と一具の遺例ではない。安政元年（一八五四）の地震で宮毘羅大將が失われ、後補像に替わっているが、十二神将像としてはわが国最古の遺品である。制作時期は天平年間（七二九～七四九）とする説が一般的である。

（法華寺）木造十一面観音立像

両手先や天衣の一部を除いて榎材から彫出し、唇に朱、頭髮・眉・髭に群青、眼に白色を塗る他は、木肌そのままに仕上げる。光明皇后の自作であるとも、インドから来た問答師という仏師が光

明皇后の御影を写して造った像ともいうが伝説の域を出ない。

（元興寺） 木造薬師如来立像

厚みのある堂々たる体軀をもち、前方を見据えて直立する薬師如来像。頭体から台座蓮肉にいたるまで、櫃の一材から彫出し、背中から内割りを通してある。ただし両手先や螺髪は別材製である。奈良国立博物館に寄託されている。

（円成寺） 木造大日如来坐像

多宝塔内に祀られる本像は、高い髻、理知的な顔立ち、バランスのよい引き締まった体軀や安定感のある脚部など見事な調和のなかに造られる。檜の寄木造、目に玉眼を嵌入する。台座に安元二年（一一七六）に仏師康慶の実弟子であった運慶が制作にあたったことが記される。

（聖林寺） 乾漆十一面観音立像

頭上に十一面を配し、左手に蓮華を挿した華瓶を持つ観音像。木心乾漆造、漆箔仕上げ。頭上面・天衣・持物・蓮華座には、当初の部分がなおむね残されて保存状態も良好である。八世紀後半の制作。もと大神神社の神宮寺であった大

御輪寺に祀られていたが、慶応四年（一八六八）に本寺に移された。

（中宮寺） 木造菩薩半跏像

円いクッションを置いた台座に、左足を踏み下げて座り、右足を左足膝上に安んじ思惟のポーズをとる菩薩像。京都・広隆寺像とともに半跏像の名品に挙げられる。制作時期はおおむね七世紀半ば前後とする見方から、六八〇年頃まで下げる見方まで幅がある。樟材を用い、複雑な寄木技法によつて造る。

（室生寺） 金堂と弥勒堂の仏像

金堂の釈迦如来立像は、近世まで薬師如来として祀られてきた像である。それは光背に七仏薬師という七体の薬師仏が描かれていることから明らかで、本来は薬師仏であったことを裏付ける古地図や文献も残る。櫃の一木造で、衣はベンガラで赤く彩り、肉身には黄土を塗っていた（現在は後世の漆塗が覆う）。九世紀中頃から後半の造像と考えられる。

十一面観音立像も本尊とほぼ同時期の作例である。やはり櫃の一木造で、彩色仕上げ。光背はすでに失われ、現在のものは後世の補作である。

弥勒堂の本尊の向かつて右側の厨子内に祀られる釈迦如来坐像は、理知的で整った顔立ち、ボリュームたつぷりの体軀は奥行も十分にとつて、膝張りも豊かで実に安定感がある。櫃の一木造。表面にはわずかに彩色の痕跡が認められる。

（岡寺） 義淵僧正坐像

義淵僧正坐像は、目尻が下がり、大きく見開いた眼が特徴的で、気骨ある老僧の雰囲気がいかに表現されている。木心乾漆造で、表面は彩色仕上げ。奈良時代後半の制作。現在は、奈良国立博物館に寄託されている。

（當麻寺） 金堂の塑造弥勒仏坐像

弥勒というと半跏思惟の菩薩形像がそれまでの主体であったが、白鳳時代には新たな弥勒思想がもたらされ、本像のような如来形の造像も行われるようになった。本像はその初期の作例であり、塑像の作例としても古い。寺が創建された天武天皇十年（六八一）ごろの造像であろう。

建築

寺院建築

仏教が公伝された六世紀中頃から大陸との交流を通して建築技術が徐々に伝わった。百濟の工人によって伝わった朝鮮半島の建築技術は、基壇を築き、礎石を据え、柱を立て、軒反り、屋垂みのある屋根は瓦で葺かれていた。明日香村にある飛鳥寺は六世紀末に建てられた本格的な仏教寺院で、仏舍利を納める塔を中央に建て、金堂は塔を囲むように東側、西側、北側の三方に配していた。七世紀後半までに創立された寺院では塔が最も重要な要素であったが、現在これらの寺院は遺跡として知られるだけである。その後、塔と金堂は並列関係で伽藍内に配され、その遺構として法隆寺西院の金堂と五重塔が挙げられる。

法隆寺西院の金堂、五重塔、中門、廻廊は飛鳥様式といわれる建築様式で建てられている。柱には胴張り(エンタシス)が見られ、軒の組物は複

雑な曲線をもつ特異な形を示す雲斗・雲肘木が用いられ、軒は一軒となっている。このような飛鳥様式の古建築は法隆寺と法起寺にしか見られない。

奈良時代になると薬師寺東塔や唐招提寺金堂のような飛鳥様式とは異なった構造の建物が建てられる。柱の胴張りは徐々に無くなり、組物は明快な形の斗と肘木の組み合わせで構成され、軒は断面円形の地垂木と角形の飛檐垂木で造られた二軒となり、意匠はもちろん基本的な構造も異なっている。このような建築様式の違いは、飛鳥時代の建築は朝鮮半島から技術が伝わり、奈良時代の建築技術は直接唐から摂取したことに起因しているが、元を正せば朝鮮半島に見られる建築技術も古い中国から伝わり、発達したものであるといえる。

飛鳥時代や奈良時代の建築には高床がなく、土間が一般的であった。但し東大寺法華堂正堂や住宅遺構である法隆寺東院伝法堂には板床があり特異な例である。柱は太く、軒桁は断面円形で、虹梁と呼ばれる梁は伸びやかな曲線を示している。金堂は仏堂の安置空間として建てられ、礼拝は堂外や礼堂から行われていた。唐招提寺金堂や元禄宝永に再建された東大寺金堂

などは南側に礼拝空間としての広い前庭が広がり、廻廊で囲まれていた。東大寺法華堂は法隆寺食堂及び細殿のような双堂形式の礼堂が南側に軒を接して建てられていたが、鎌倉時代に礼堂を建て替え、正堂と一体化された。

奈良時代後期から平安時代にかけて、建築技術は我が国の中で独自の発達を示し、仏堂は仏だけの空間から仏と人間が共存する空間へと変化し、日本の風土・気候、習慣などと融合した建物が造られるようになる。いわゆる建築の国風化である。基壇の代わりに亀腹が築かれ、土間から高床形式へ、そして建物の周囲には縁が廻り、建具も薮戸が多用され住宅的な要素が強くなる。平安時代前期の室生寺金堂にその傾向が見られる。正暦元年(九九〇)建立の法隆寺大講堂で初見する野屋根構造は平面計画の自由化を促進し、仏の空間であった堂内に礼拝空間や参籠空間が誕生する。永暦二年(一一六一)の當麻寺本堂や鎌倉時代の長弓寺本堂、靈山寺本堂、室町時代の松尾寺本堂、瑞花院本堂、不動院本堂は中世仏堂と呼ばれ、堂内は外陣、内陣、脇陣に区画されている。

平安時代末の治承四年(一一八〇)、平重衡による南都焼討ちで東大寺、興福寺の主要建造物

は焼失した。東大寺の復興は俊乗房重源が大勸進となり、中国工人陳和卿の協力を得て南宋の建築様式である大仏様で行った。その遺構として、**東大寺南大門、東大寺開山堂内陣、東大寺法華堂礼堂**等があり、重源の跡を継いだ栄西は**東大寺鐘樓**を再建した。大仏様建築は、太い円柱を一定の断面を持つ貫で幾段も通して繋ぎ、断面円形の太い虹梁をのせて屋根を支えている。大仏様はこれまで我が国で育まれた建築様式とは異なり、豪快な構造美を前面に出す技法で、繊細な表現を好む日本人にはなかなか受け入れられなかった。しかし貫を使用した堅固な構造、棧唐戸、貫等の端部に施す装飾的な繰形などの技法は、東大寺復興に従事した工匠等によって、和様建築の中に取り入れられ、南都から畿内へ、そして瀬戸内へと伝播した。**元興寺極楽坊本堂、唐招提寺鼓樓、長弓寺本堂、靈山寺本堂、薬師寺東院堂**といった鎌倉時代を代表する建築には貫、木鼻、棧唐戸といった大仏様系の技法が見られ、また後の時代にも東大寺大仏殿のような大建築が建てられるときには大仏様が用いられた。

興福寺の復興は京下工、官行事所工、興福寺工が建物を分担して行っている。鎌倉時代に復

興された建物で現存するのは北円堂と三重塔のみである。**北円堂**の再建は興福寺工と官行事所工が協力して行っている。復興は前代を踏襲した建築様式である和様で行われたが、構造強化のため見え隠れ部に貫が使用され、大仏様の新技術を取り入れている。**三重塔**は建立年代が明確ではないが、鎌倉時代前期に再建されている。その外観は北円堂や応永年間に再建された東金堂、五重塔に比べて優雅で繊細であり、平安時代に発達した繊細な和様建築の気風を伝えている。

東大寺や興福寺の復興は南都の建築界を活気づけ、建築技術の発達を促した。このことと南都仏教を復活させた西大寺の叡尊を筆頭とする高僧等の出現により、南都寺院の建物の再建や修理が活発に行われるようになる。

鎌倉時代における南都の建築で忘れてはならないもう一つの出来事は、僧房の再建と改築である。僧房は僧侶の規律ある集団生活の場で、奈良時代の寺院にはなくてはならない施設であったが、九世紀に伝来した密教は山岳に拠って任意に子院を構えたり、貴族の子弟が境内に別院を構えたりして僧房の必要性が少なくなり、僧房本来の姿を変えていった。鎌倉時代には、僧房は

その機能が消失し、他の機能をもつ建築に改修、または建て替えられた。**法隆寺東室**は奈良時代の僧房の遺構であるが、その南端部を鎌倉時代に聖徳太子を祀る聖霊院に建て替えている。また**法隆寺三経院及び西室**や**唐招提寺礼堂**は鎌倉時代に僧房を建て替えたもので、**元興寺極楽坊本堂**や**禅室**は奈良時代の僧房を改造した遺構である。このように僧房の一部を念仏を講じる建物や、寺院の開山を祀る空間に変化させている。

室町時代は先に述べた中世本堂が建てられ、長い戦乱で荒廃した神社は、桃山時代に再び復興の槌音が響きはじめる。**法華寺本堂・鐘樓・南門**は再建され、法隆寺の諸堂は修理された。これらの復興事業は豊臣秀頼の援助で行われた。

桃山時代から江戸時代にかけて、社会は安定し、社寺は宗教活動への専念が課せられ、保護された。このような中で、全国的には徳川幕府や大名の援助で装飾性豊かな建築が建てられたが、大和国は天領が多く、中世以来の宗教王国であったため、伝統色が強い建築が建てられている。**長谷寺本堂、東大寺二月堂、東大寺金堂、興福寺南円堂、西大寺本堂**などは代表的な建物で、中世以来の形態を引き継いでいる。

神社建築

一般的に本殿建築は、比較的小規模な切妻造の建物で、土台を置き、円柱を立て、植物性材料で屋根を葺き、板壁となっている。県内の本殿建築は春日造が圧倒的に多く、全国的に最も多い流造はさほど多くない。

春日造は切妻造、妻入の社殿の正面に階隠を付けた形式で、奈良県を中心に近畿一円に分布している。現春日大社本社本殿は文久三年（一八六三）に造り替えられたものであるが、春日造の古式な形式であると考えられ、その成立は鎌倉時代以前であることは確実で、春日大社が創始された奈良時代には成立していたとも考えられている。春日造は軒廻り、組物、縁廻り、木階の有無等で異なる形式がみられる。現存する最古の春日造本殿は鎌倉時代初期に建立された円成寺春日堂・白山堂で、春日大社本殿とは組物や軒廻りの形式が異なっている。奈良県に春日造の本殿が多いことは、中世末まで県内の各地に春日社興福寺領が多く、その影響を受けたものといえる。中世から近世にかけて春日大社の本殿はほぼ二十年毎に建て替えられ、旧社殿は春

日社縁の地へ譲渡され移築されている。春日移しの本殿として、崇道天皇社本殿、長尾神社本殿、夜支布山口神社、撰社立磐神社本殿、比売久波神社本殿、龍穴神社本殿等が挙げられる。

流造は切妻造、平入の建物正面に庇を付けた形式で、一間社、三間社、五間社といった奇数間社が存在する。手向山八幡宮境内社住吉神社本殿は鎌倉時代後期に建立され、県内流造本殿としては最も古く、天文十二年（一五四三）に建立された高鴨神社本殿は正面庇中央に唐破風を付けた形式で、県内では数少ない装飾性豊かな本殿建築である。

本殿は一神一社殿が基本であり、複数の祭神を祀る場合は、春日大社本社本殿のように社殿を並列に並べるか、または添御縣坐神社本殿のように一間社流造の社殿を横に連結する手法が取られる。中には吉野水分神社本殿のように春日造と流造が連結した連棟形式が見られる。

拝殿の遺構として県内で最も古いのは、鎌倉時代前期に建立された石上神宮拝殿で、入母屋造、檜皮葺で規模の大きい建物である。入母屋造の拝殿としては談山神社拝殿があり、切妻造の大神神社拝殿とともに江戸時代の建立で、大神神社拝殿は正面中央に唐破風を付け、建物の

中心性を高めている。正安二年（一三〇〇）に建立された石上神宮撰社出雲建雄神社拝殿は、明治初年の廃仏毀釈で廃寺となった内山永久寺の鎮守であった住吉神社拝殿で、大正三年（一九一四）に現在地へ移築された。この拝殿は切妻造で、建物中央に馬道を設けた割拝殿で、簡素で繊細な意匠を有している。

神社には本殿・拝殿以外に、祭礼に必要な諸施設が建てられている。春日大社には毎年三月に行われる春日祭にお供えをする御酒を造る酒殿、神饌を調理する竈殿、勅使が着到の儀を行う着到殿、勅使の牛車を格納する車舎などがみられる。また、社殿を朱で塗装すること、春日大社南門や中門が楼門形式であること、神域を廻廊で囲むことは、仏教建築の影響である。

住宅建築

県内に見られる客殿・書院等の住宅関係遺構は、寺院やその子院の住職が住する施設である庫裏（庫裡）、またこれと一体となったもの、または別棟で建てられたものに区分され、その大部分は近世初期に建立されたものである。しかし、法隆寺薬師坊庫裏、法隆寺北室院太子殿、今西

家書院、吉水神社書院のように室町時代に建立されたものや法隆寺西園院客殿、法華寺客殿、當麻寺奥院方丈のように桃山時代に遡るものも僅かながら存在する。

唐招提寺に移築され御影堂として活用されている旧一乗院宸殿・殿上および玄関は、興福寺別当坊であつた一乗院の表御殿で、慶安三年（一六五〇）に建立された公家住宅の遺構で、寝殿造の系統を引く建物である。橿原神宮に移築活用されている旧織田屋形は、天保十五年（一八四四）に建立された織田柳本藩の陣屋のうち、玄関と大書院で、武家住宅の遺構である。興福院客殿、達磨寺方丈は禅宗寺院の塔頭の方丈形式を示すもので、いずれも江戸時代前期に建立されている。慈光院書院は茶室を併設した数寄屋風の建物で、前面に広がる庭と一体的に構成されている。同様に茶室と庭を組み合わせた書院としては當麻寺中之坊書院がある。法隆寺薬師坊庫裏、正暦寺福寿院客殿及び台所、長岳寺旧地藏院庫裏、玉置神社社務所及び台所は、寺院或いは子院の庫裏に書院の機能を付した建物で、法隆寺西園院客殿、岡寺書院、當麻奥院方丈は庫裏と別棟で建てられた書院造の建物である。

民家建築

民家はその地方、地方の気候・風土にあつた形態で建てられている。大和の民家といえど、誰しも大和棟を想起し、その分布は奈良盆地から河内にかけて多く見られた。大和棟の発生はさほど古くはなく、十八世紀中頃と考えられ、十八世紀初期以前に建設された民家の多くは入母屋造で、後世、大和棟に改変されていることが多し。間取りは田の字形と呼ばれる整形四間取りが多く、竈屋上部は瓦葺の落棟となり、草葺屋根の両端には高塀が立ち上がっている。現在では急激な生活様式の変化で伝統的な民家が更新され、また草葺屋根の維持が困難で、ほとんどその姿を消している。

県内で文化財に指定されている民家で最も古い五條市の堀家住宅は、室町時代後期に建てられ、明治に大改造されている。建設年代の明確な民家のうち最も古いのは五條市の栗山家住宅で、慶長十二年（一六〇七）に建てられ、民家とは思えない重厚な構えである。御所市にある中村家住宅は寛永九年（一六三二）、宇陀市の笹岡家住宅は寛永年間（一六二四～四四）、同じく片岡家住宅は寛文九年（一六六九）の建築で、非常に古い民家が存在する。重要伝統的建造物群保存地区に選定されている橿原市今井町には慶安三年（一六五〇）の今西家住宅、寛文二年（一六六二）の豊田家住宅を含む十件の文化財指定された民家がある。安堵町の中家住宅や橿原市の森村家住宅は主屋だけでなく、付属屋を含む屋敷構えすべてが保存されている。

近代建築

明治における奈良県は歴史的風土を保存し、観光立県として整備する施策が進められた。この施策は江戸時代に始まり、現在も続けられている。そのため、公共建築などは洋風建築よりも和風建築で建てられることが多かった。旧奈良県物産陳列所（現奈良国立博物館付属仏教美術センター）、旧奈良県立奈良図書館（現大和郡山市市民会館）、旧高市郡教育博物館（現橿原市今井町並交流センター）、登録文化財である奈良市の日本聖公会奈良基督教会などがある。現在では見ることができなくなった旧奈良県庁舎、旧奈良県公会堂なども近代和風建築であつた。しかし、旧奈良女子高等師範学校（現奈

良女子大学）本館、宝山寺獅子閣といった木造洋風建築、旧帝国奈良博物館（現奈良国立博物館本館）、奈良少年刑務所などの煉瓦組積造の洋風建築も建てられている。

その他の木造建造物・石造物等

寺院の施設として湯屋がある。東大寺、大安寺、法隆寺など奈良時代の大寺院には「温室院」「温室」と称する沐浴施設があり、『法華滅罪寺縁起』には光明皇后が難病の千人施浴として浴室を建立したと伝える。古代の浴室は現存しないが、県内に遺る浴室は、室町時代中期に建立されたものが最も古く、東大寺大湯屋、興福寺大湯屋がある。東大寺大湯屋は大釜で湧かした湯をかける掛湯方式で、法隆寺大湯屋、東大寺二月堂湯屋も同じ方式の湯屋である。掛湯方式に対して蒸気を浴室に満たす蒸気方式の浴室として興福寺大湯屋、法華寺浴室（から風呂）がある。

傘を広げたような外観を有する建造物として、長岳寺五智堂や葛城市染野の傘堂がある。五智堂は天理市柳本町にあり、鎌倉時代に建立されたが、その経緯は不明である。傘堂は當麻寺

の北方にあり、郡山藩主本多政勝の菩提を弔うため、家臣であった吉弘統家が延宝二年（一六七四）に建立している。

木造以外に石造建造物も県内には多くある。五輪塔、宝篋印塔、層塔、宝塔、廟塔、納経塔、石室、石仏龕、鳥居などで、五輪塔が最も多く、次いで層塔がある。これら石造建造物のうち、造立が平安時代に遡るものは凝灰岩製であり、鎌倉時代以降に造立されたものは花崗岩製が多い。西大寺奥院に建つ五輪塔は叡尊の墓と伝え、鎌倉時代に造立された花崗岩製の大規模な見応えのある石造建造物である。

集落と町並み

奈良町都市景観形成地区

奈良町は中世において、東大寺、興福寺の門前町として形成された町と、中世末から近世初期にかけて元興寺境内地が急速に市街化した町等で構成され、近世から明治にかけて大和の商業の中心として発展した。なかでも元興寺周辺は町割りや伝統的な家屋がよく残っているところである。

平成二年三月、奈良市都市景観条例が制定され、平成六年四月、元興寺周辺を中心とした東西一八〇〇^{メートル}、南北九〇〇^{メートル}の四八・三^{センチメートル}は奈良町都市景観形成地区に指定された。地区内の町家は幕末から明治にかけて建てられたものが多く、敷地は間口が狭く奥行きが深い。主屋は街路に面して建ち、その奥に中庭を挟んで離れ座敷または蔵、裏庭となっている。町家の表構えは格子が嵌められたものが多く、出入り口には庚申信仰のマスコットである申をつるしている。格子の種類は多様で、木が太いほど古い形式であ

るといえる。格子構えそのものは後世の改造によるものが多くあり、当初は揚げ店、葺が多かったようで、このような構えは、元興寺町の重要文化財藤岡家住宅、南城戸町の県指定文化財細川家住宅にみられる。また軒は重要文化財十輪院南門のような板軒が見られる。これも奈良町民家の特徴である。

橿原市今井町伝統的建造物群保存地区

今井は中世末、寺内町として形成され、近在から在郷武士を含む有力な信徒が移住し、近世初期には四周を環濠と土居で囲んだ現在の町割りが成立した。近世を通じて、大幅な自治権が認められた大和の商業の中心地として発展し、大名貸しを行うような商人も誕生している。

橿原市今井町伝統的建造物群保存地区は旧環濠で囲まれた東西約六〇〇^{メートル}、南北約三〇〇^{メートル}のほぼ矩形の区域と東辺を流れる飛鳥川西岸を加えた面積一七・四^{ヘクタール}である。地区内には東西六本、南北九本の道路が通り、江戸時代から明治・大正・昭和初期にかけて建てられた民家が多数保存され、近世初頭の町割りが今もそのまま伝えられている。今井に見られる町家は、戸建て民家と長屋形式に区分され、今西家住宅や

豊田家住宅をはじめとする重要文化財に指定された民家が八件、県指定民家が二件存在し、また今井の形成に中心的役割を果たした称念寺の本堂は重要文化財に指定されている。このほか、順明寺、西光寺や春日神社も今井の歴史的景観の重要な構成要素となっている。今井は伝統的な住宅が高密度に見られる住宅地で、わが国有数の歴史的市街地である。

宇陀市松山地区伝統的建造物群保存地区

松山地区は宇陀市の西南に位置し、近世城下の商家町から在郷町へと変遷したところである。交通の要所であった松山は人馬継所として、また宇陀紙、吉野葛といった特産物を活かして商業活動を発展させ、地域経済の中心地として栄えた。松山は、明治になっても裁判所、郡役所、図書館などの公共施設が置かれ、地域の行政の中枢として重要な役割を果たした。

宇陀市松山地区伝統的建造物群保存地区は、東西約三四〇^{メートル}、南北約一四七〇^{メートル}、面積一七^{ヘクタール}、宇陀川に沿って緩やかにカーブを描いて南北に延びる通りに、江戸時代から昭和前期にかけて建てられた建物が連続する。また町中や古城山西麓に点在する社寺、宇陀川を水源として

地区内を流れる水路、さらに地区東方に広がる古城山等が一体となつて歴史的景観を構成している。

五條の町並み

五條は紀州街道(伊勢街道)、金剛道、西熊野街道が交差し、吉野川の水運も利用できる交通の要所であつた。近世初頭の五條はこの交通の利便性を活かし、吉野の産物を諸国に送る中継地としての役割を担い、商業活動が活発であつた。また、近世中頃からは熊野詣、高野山参り、或いは吉野名所めぐりなどで通行量も増え、宿場町としても繁栄した。

町並みは慶長十二年(一六〇七)に建設された重要文化財栗山家住宅や奈良県指定文化財中家住宅が建つ国道一六八号線沿いの五條一丁目が東端で、そこから西へ延びる旧紀州街道の両脇に古い家並みが約一^キにわたつて見られ、その主要部分は新町が占めている。新町は関ヶ原の戦い後、五條二見藩主となつた元筒井氏家老の松倉重政が五條村・二見村間に形成しつつあつた町場を取り立て、諸役を免除して商業活動を奨励し、発展した街村である。慶長十五年(一六一〇)には九十三軒の町家が立ち並び、この当時、

すでに町場はほぼ現在と同じ規模に成立していたといえる。

城下町(大和郡山・高取)

大和国は平安時代から室町時代末まで興福寺が事実上の守護職を勤めた社寺王国であつたが、豊臣秀長の大和郡山への入部で終止符が打たれた。豊臣秀長は郡山城を居城とし、宇陀松山城、高取城を支城として大和一国を支配する体制を整えた。

大和郡山は筒井順慶の築城に始まり、豊臣秀長、増田長盛による城郭、城下町の本格的な拡張整備で近世大和郡山の骨格ができあがる。豊臣秀長は南都の商業的賑わいを郡山に移して、短期間で城下町を形成した。この時、商業の先進地から集められた商人が住む堺町・奈良町・今井町、同業者同士を集めた鍛冶町・紺屋町・大工町などの今に残る町割りや、「箱本十三町」と呼ばれる自治制度を確立した。増田長盛は城下の拡大に伴つて、秋篠川を付け替えて外堀をめぐらした。慶長五年(一六〇〇)の関ヶ原の戦い後、郡山城は一時廃城となり、町は衰退するが、元和元年(一六一五)、水野勝成の入部で城郭及び城下は徐々に復興され、次いで入部した

松平忠明も積極的に整備事業を行い、郡山の復興をほぼ終えている。

郡山城の建物は明治六年に売却処分されたため、今に伝わるものはなく、往時のものは石垣と堀だけで、近年、城門と櫓が新築された。郡山城跡は奈良県指定の史跡で、桜の名所となっている。武家屋敷地の町割りは全く原形を留めておらず、これに対して町人地であつた部分の町割りや外堀はよく残り、外堀は埋め立てられて公園に活用されているが、町中に鉄筋コンクリート造の共同住宅が建ち、都市計画道路が貫通するなど、町は急速に変貌している。

高取城は高取山山頂にある日本三大山城の一つで、中世「かきあげ城」と呼ばれ近世的城郭の特徴を備えたものとして、国史跡に指定されている。

高取の城下町は八木から壺阪寺へ通ずる街道に沿つて発達した街村形式の町場で、北から観覚寺、下土佐、土佐町、下子嶋の四町で構成されている。土佐町から壺阪道への分岐点は高札が立てられたところで札之辻と呼ばれていた。札之辻には釘抜門があり、この門から山上にかけて城郭となり、武家屋敷地となつていた。土佐町は土佐村の一角に誕生し、下子嶋村に大きく食い込

む「かけ造り」の町場として天正年間に成立したと考えられている。他の三町は街道から北へ少し離れた古道にあった村々が街道端へ移り、近世初期に「四町」が成立した。土佐町は「四町」の主格で、藩から特権を与えられ、その代償として藩御用の役目を負っていた。

高取城は明治中頃まで天守や櫓が存在していたが、現在は石垣だけが残り、武家屋敷はほとんど無くなっている。これに対して町場は城下町としての雰囲気をよく伝えている。

環濠集落

奈良盆地には環濠集落が多く存在することである。これまでの調査研究で環濠集落であると確認または推定できるものは二百前後存在するといわれ、大和郡山市、天理市、田原本町、橿原市に多く分布している。環濠集落は防御を目的に中世後期に作られたものが多く、城郭として位置づけられるもの、そうでないものに区分される。

大和郡山市稗田町の稗田環濠は、典型的な大和の環濠集落として有名で、集落の東南部に『古事記』編纂に寄与した稗田阿礼を祀る賣太神社が鎮座している。稗田環濠は室町時代中期には

成立していたと考えられ、城郭として機能していたことが記録から確認されている。集落は東西二五〇^ミ、南北二五〇^ミの規模で、西南部分を南へ張り出している。集落内の街路は南北路が集落のほぼ中央を貫通し、東西路は集落南辺を走る。この二本の街路から細い道が遠見遮断の屈折をしながら枝分かれしている。環濠は大和郡山市の史跡に指定されており、西側、南側の全面と北側の西半分が改修され、周回道路も整備されている。稗田環濠の近くには、番条、若槻の環濠集落があり、いずれも城郭的性格を兼ね備えた集落である。

門前町の初瀬郷と三輪郷

初瀬は伊勢街道の通過点で、長谷寺の門前に位置する。長谷寺の観音信仰は貴族等の間で平安時代から高まり、盛んに参詣が行われたが、初瀬郷の発生は、民間信仰としての伊勢参りが盛んとなり、その道筋にあたる長谷寺へも庶民が足を留めた鎌倉時代末ごろから室町時代初めごろと考えられている。民間信仰の高まりとともに初瀬郷は町場としての傾向が強くなり、門前町、宿場町として発展した。天正十一年（一五八三）には、旅宿を含めて町家は二百軒ほど立ち

並んでいたという。近世には、万治二年（一六五九）の大火災や文化八年（一八一）の「初瀬流れ」と呼ばれる大洪水が起こり、町場は大打撃を受けるが、民衆経済の成長による長谷寺への参詣人の増加で旅籠や公家・大名等の公用・参勤のための本陣が設けられ、商業的發展は明治以降も続いた。

初瀬は今も長谷寺の門前町として賑わっており、国道一六五号線から離れて旧伊勢街道へ入り東へ進むと、街道の両脇には幕末から明治・大正にかけて建てられた旅館や飲食店、草餅を商う商家が軒を連ね、その中の山田酒店は登録文化財になっている。

三輪は大神神社、平等寺、大御輪寺があり、これらへの信仰で訪れる人々も多かったが、長谷詣、伊勢参りへの通行人が増えると、その通過点である三輪への参詣も自然と増加し、上街道の宿場町、大神神社門前町としての傾向が強くなり、加えて三輪市に始まる市場町としても栄えた。今も、三輪の町中を通る旧街道沿いには旧門前町を伝える商家や民家が立ち並んでいる。

奈良の世界遺産

日本の世界遺産は平成十九年八月現在十四件であり、そのうち奈良県には三つが存在することになる。

法隆寺地域の仏教建造物（平成五年登録）

法隆寺、および法起寺の建造物の総称である。

古都奈良の文化財（平成十年登録）

東大寺・興福寺・春日大社・元興寺・薬師寺・唐招提寺・平城宮跡・春日山原始林の八つの資産で構成されている。

紀伊山地の霊場と参詣道（平成十六年登録）

奈良県内の構成施設としては、吉野山、吉野水分神社、金峯神社、金峯山寺、吉水神社、大峯山寺、大峯奥駈道（玉置神社を含む）、熊野参詣道 小辺路。

大峯奥駈道は、役行者が八世紀初めに開いたとされる修験者の修行の道である。吉野山から

熊野まで山上ヶ岳、弥山、八経ヶ岳など二〇〇以上の近い山々の尾根が連なる修験道の根本道場と言われ、紀伊山地の中で最も奥深い山路である。この道では古来より奥駈と言われる修行が行われている。幾日もの間、早朝より深夜まで谷を渡り、崖をよじ登り、歩き続ける修験道の中でも最も厳しい修行として有名である。随所に行場が設けられているほか、「仏経嶽原始林」などの豊かな自然も残されている。

「熊野参詣道小辺路」は、高野山と熊野三山の二つの聖地を結び、熊野本宮までの最短路の道である。道中は一〇〇〇以上の急坂を越える三つの峠があり、つづら折りの急坂が多い道だが、豊かな自然が今も手付かずに残っている。また、峠道などにも石畳の道が良好な状態で続いているほか、沿道には小規模な寺院や旅館の遺跡、道標、石仏などがあり、熊野参詣道の中でも、往時を偲ぶにはこの道が最高との評もある。

祭と芸能

●正月

古寺では修正会が執行され、村落の堂では堂の床や縁側を叩いて音を発して悪魔を退散させるランジョウなどと呼ばれる法会が行われる。吉野郡野迫川村ではこれをオコナイと呼び、北今西では阿弥陀堂内でカズラの輪をねじ切る勇壮な行事があり、弓手原では青年の貝吹きや造花を奪い合うハナタバリなどを行う。

小正月には、御所市の吉祥草寺で大規模な雌雄一对の松明を燃やす茅原のトンドや五條市大津町の念仏寺陀々堂で父母子三匹の鬼が燃えさかる松明を手にして堂内を巡る鬼走りが行われる。現在では正月から五月にかけて行われるお田植行事も、もとは正月に行われることが多く、オンダと呼ばれて、農耕の模倣行為が行われる。飛鳥坐神社（高市郡明日香村飛鳥）のおんだ祭（二月第一日曜日）は、奇祭などと称され関心を呼ぶが、翁が農作業の様を演じてから、天狗とお多福が交合するという構成を見れば、稲の穂

孕みを期待する巧みな演出であることがわかる。

●春から夏へ

春の祭りは多くはないが、天理市の大和神社のちゃんちゃん祭（四月一日）がよく知られる。郷村単位の祭りで、のんびりとしたお渡りや御旅所での会食や行事は興味深い。神職が演じる狂言が行われる春日大社摂社水谷神社の鎮花祭（四月五日）や大神神社とその摂社狭井神社の鎮花祭（四月十八日）、率川神社の三枝祭（六月十七日）など花鎮めの祭りもある。

●夏

盆には、家庭毎に辻や橋のたもとで先祖の霊（オシヨライサン、ソソジョサン）を迎えて丁寧に祀られる。こうした先祖の霊を迎え送る行事が大規模化したものが橿原市東坊城町で八月十五日に行われるホーランヤである。二つの神社の境内で大小十七の松明が日中の炎天下に燃やされる。

盆踊りは各地で行われているが、かつて流行した祭文音頭が奈良市田原地区で今も伝承されているほか、吉野郡十津川村では大踊りやその他の踊りの保存継承に取り組んでいる。この時期は

在家による歌う念仏である六斎念仏が県内各地で伝承されていた。芸能的要素のない純粋な念仏六斎であるため衰退は著しいが、奈良市八島の大小二つの太鼓を併せ用いるものと、鉦のみを用いる生駒郡安堵町東安堵の六斎が健在である。毎年踊られる唯一の太鼓踊りである大柳生の太鼓踊りは八月十七日に行われる。

●秋から冬へ

県内の祭りと芸能は秋に集中している。本県ではマツリといえど秋祭りを意味する。

大和高原では、田楽・翁舞・相撲を奉納する秋祭りが点々とあり、奈良市奈良阪町の奈良豆比古神社では、十月八日に三人の翁が舞う翁舞があり、盆地西部の往馬大社では他に例を見ない火取行事が行われる。

茅原のトンド

◎御所市茅原

日時Ⅱ 一月十四日 場所Ⅱ 吉祥草寺

奈良盆地南部、修験道の開祖役行者生誕地とされる御所市茅原の吉祥草寺では、一月十四日に雌雄一对の大松明を境内で燃やすトンド行事

が行われる。

この行事は修正会結願の行事として、吉祥草寺と茅原・玉手の二大字で実施される。夜八時頃に各所で手打ちを繰り返しながら両大字の区民ほかが境内に入場し、本堂内で読経をしてから、玉手区の世襲の点火役が灯明の火で、その年のアキの方角から点火する。

参拝者は翌日の小豆粥の火種として火縄を持ち帰り、燃え残りの萱は苗代を作るときの水口祭りに利用される。

修験道寺院の修正会と農村行事が結びついた県内では珍しい大規模なトンド行事である。

篠原踊り

◎五條市大塔町篠原

日時Ⅱ一月二十五日 場所Ⅱ天神社

篠原踊りは狼退治を神に祈願し、その「願果し」として踊られ始めたという。現在は集落からさらに高所の天神社の境内で、一月二十五日の「神事始め」の日に、式三番と呼ばれる「梅の古木踊り」「宝踊り」「世の中踊り」が奉納される。音頭に合せて紋付き袴姿の男が締太鼓を打ち、女は扇を採って時に開き時に閉じて、さまざまな

手振りで踊る。

踊りの中には、男が締太鼓を胸に吊る曲や足を伸ばして坐り、足先に太鼓を置いて打つ曲、円陣を組んで廻りながら、内へまた外に向かって打つ曲などもあり、芸態は変化に富んでいる。

惣谷狂言

◎五條市大塔町惣谷

日時Ⅱ一月二十五日 場所Ⅱ天神社

惣谷狂言は、隣村篠原と同様に踊りと狂言の双方が演じられていたが、踊りは廃れ、狂言のみが伝えられている。

狂言は明治四十年頃から中絶し、大正の大典祝賀で上演されて以来永らく途絶えていたが、昭和三十二年に復活した。もとは一月二十五日に氏神天神社で踊りが奉納された後、円満寺で踊りと狂言が交互に演じられていた。現在では同日に神社で狂言が毎年曲目を替えながら演じられている。

能狂言にあるもの、地狂言めいたもの、祝福芸を取り入れたもの、鳥刺舞を狂言仕立てにしたものなど種類は豊富で、永年にわたって取り入れられた狂言が伝わる。

一月二十五日には、篠原と惣谷の二地区が午前と午後を毎年交代しながら、一日で両地区の芸能が見られるように公開している。

東大寺二月堂修二会

◎奈良市雑司町

日時Ⅱ二月二十日～三月十四日

場所Ⅱ東大寺二月堂

東大寺二月堂では毎年三月一日から十四日まで修二会が執り行われる。十一面観音に罪過を懺悔してその功德によつて除災招福を祈る悔過法要であるが、井戸（若狭井）から水を汲んで本尊に供えるので「お水取り」とも、大きな松明が登場するので「お松明」とも一般には呼ばれて、奈良に春を呼ぶ法会として親しまれている。

この法会は東大寺の開基良弁僧正の高弟であった実忠和尚が、天平勝宝四年（七五二）の大仏開眼供養の年の二月に創始したもので（『東大寺要録』）、以来「不退の行法」として千二百五十年余り途絶えることなく続けられて現在に至っている。

修二会は二月二十日から二十五日（閏年は二十六日）まで戒壇院の別火坊で行われる前行の

前半である六日間の試別火から始まる。蛭子川の水で自らと諸道具を祓い清めて、俗界とは火を別にする精進の生活に入り、修二会に着る紙衣や二月堂を荘厳する椿の造花を作る。二月二十六日から二十八日（閏年は二十七日から二十九日）までは前行後半の総別火となり、練行衆は全員寝起きをともにして潔斎の生活を送り、さらに声明の稽古に励む。

二月末日に練行衆は別火坊から二月堂下の参籠宿所に移動し、翌三月一日から二週間の本行となる。本行の間毎日、日中・日没・初夜・半夜・後夜・晨朝の「六時の行法」が勤められる。

練行衆が初夜の法要に上堂する時には、足下を照らすために大きな松明が出る。三月十二日は特に大きな籠松明が登場し、二月堂の欄干で振り回され、飛び散る火の粉の光景を一目見ようと近年特に参詣人が殺到する。

この悔過法要以外に、毎日の初夜の法要の後には、日本中の神々を二月堂に勧請する「神名帳」の読み上げがあり、三月五日には実忠忌、三月五日と十二日には「過去帳」が読まれ、聖武天皇をはじめとするゆかりの人々や「青衣女人」が登場する。三月七日には、小観音の出御と後入があり、三月五〜七日と十二〜十四日の半夜の後

には、本尊の周囲をめぐり五体投地（身体を礼堂の板に繰り返し打ち付ける）をする「走り」の行法、三月十二〜十四日の後夜の終わりには、燃えさかる松明を手にした火天役が水天役とともに鈴・錫杖・法螺貝の音に合わせて踊るように動き、最後に松明を床板に打ち据える「達陀」という火の行法もある。なかでも修二会を象徴する付加儀礼として最もよく知られているのが、修二会の俗称ともなっている「水取り」である。三月十二日の後夜（十三日の午前二時頃）に、咒師を先頭に六人の練行衆が二月堂下の閼伽井屋に向かい、堂童子が中の若狭井から水を汲み上げて、本尊に供えられて後、参詣人にも分け与えられる。修二会は三月十四日に終わり、十五日には礼堂涅槃講が行われ、満行となる。

薪御能

◎奈良市春日野町、奈良市登大路町
日時Ⅱ五月十一日、十二日
場所Ⅱ春日大社、興福寺

奈良市の春日大社と興福寺では、五月十一日、十二日の両日に、薪御能が行われる。この薪御能は、現在全国で広く実施されている野外能の

発祥といえるもので、古くは興福寺の修二会に参勤して行われた。

興福寺の修二会は貞観十一年（八六九）に始められたと伝えるが、法会で使用される神聖な薪が興福寺の西金堂へ薪迎えとして東方の春日山から運ばれ、その薪を祝福する芸能として猿楽が演じられたために、薪猿楽と称されるようになった。後に東金堂の前庭でも行われるようになるが、建長七年（一二五五）には場所を興福寺の南大門「般若の芝」に移された。また、永徳三年（一三三三）頃からは、修二会と切り離して薪猿楽が二月に行われ、ここにさらに芸能的に発展する基盤が形成されることとなった。

南大門前に移ってから、二月五日に春日社頭で「呪師走り」が行われ、六日から七日間は南大門で四座の猿楽（門の能、薪能）が演じられ、八日からは金春・金剛・観世・宝生の順で一日一座ずつ春日社頭に参勤し（御社上り、これらの日の演能は他の三座が勤める）、最終日十二日には四座が立合い南大門で演能が行われた。

その後江戸幕府も薪能の維持を命じていたが、のち観世座は参勤が免除され、残る三座も寛文三年（一六六三）以降は二座が交代して参勤することとなった。維新後、明治三年までは金春座

だけで薪能は維持されたが、翌四年に領地の上知(没収)があつて、経済的基盤を失い中断した。

以降は断続的に行われ、昭和二十一年から二十五年までは春日大社神事能として若宮神社御社上りの儀が始まった。翌昭和二十六年から県主催で戦後第一回の薪能が行われ、昭和三十六年には保存会が結成、公開期日も五月の十一日、十二日が定例とされている。

十一日には午前十一時から春日大社舞殿で「呪師走りの儀」として金春流による「翁」が舞われ、夕刻五時半から興福寺南大門(般若の芝)で能と狂言が行われる。翌日も午前十一時から春日大社若宮社の拝舎で「御社上りの儀」として能があり、夕刻五時半再び興福寺南大門(般若の芝)で能と狂言が演じられる。

當麻寺練供養会式(二十五菩薩来迎会)

◎葛城市當麻

日時Ⅱ五月十四日 場所Ⅱ當麻寺

中将姫伝説と蓮糸曼荼羅で名高い當麻寺では、毎年五月十四日に「聖衆来迎練供養会式」(「當麻のオネリ」「當麻レンド(レンゾ)」「當麻エシキ」)が行われる。この行事は、観音菩薩・勢至菩薩な

どのいわゆる二十五菩薩に扮装した人々が、西方極楽浄土に模した曼荼羅堂から、人間世界にあたる娑婆堂へ赴き、中将姫を蓮台にすくいあげて再び浄土へと帰る来迎引接のさまを、目のあたりに見せる宗教劇である。この宗教劇は阿弥陀仏四十八願の第十九願「聖衆来迎願」の浄土教的な理解を表すもので、阿弥陀仏が聖衆を伴つて、極楽浄土から紫雲に乗じて臨終の念仏行者を迎えに訪れる来迎会を表現しているものである。

五月十四日午後四時頃からまず中将姫坐像を乗せた輿が娑婆堂内に入れられたあと、来迎の行道が始まる。天人、竜樹菩薩・地藏菩薩以下の諸菩薩が、それぞれ羽織袴姿の介添人に導かれて来迎橋を渡る。観音菩薩は金の蓮台を手に中将姫を迎えに行くのでスクイボトケ、合掌しながら続く勢至菩薩はオガミボトケと呼ばれる。この両菩薩は「練る」を形容するにふさわしい所作をする。「一歩前進、半歩戻る」という歩み方で、体を左右にねじりダイナミックな独特の動きを見せながら来迎橋を歩む。娑婆堂に至ると、観音菩薩の持つ蓮台に中将姫坐像から取り出した宝冠阿弥陀坐像が据えられ、再び来迎橋を渡り極楽堂へと引接の行道を行う。

唐招提寺うちわまき

◎奈良市五条町

日時Ⅱ五月十九日 場所Ⅱ唐招提寺

唐招提寺では、五月十九日に梵網会が行われる。四〇ほどの細竹の上部にハート型のおおぐ部分を取り付けた独特のうちわ(宝扇)が撒かれるため、一般には「うちわまき」と称して親しまれている。この法会は、鎌倉時代に同寺の復興に努めた大悲菩薩覺盛上人(一一九四―一二四九)が、修行中に蚊を弟子がうちわで追い払おうとしたところ、蚊に血を吸わせるのも布施の行と諭したとされ、入滅後に毎年その忌日に法華寺の尼衆などが扇を作り仏前に供えたという故事により行われている。

当日午後二時頃から講堂で梵網会が行われ、堂前で舞楽奉納があり、四時頃からうちわが鼓楼(舍利殿)から撒かれ、参拝者はこれを競って取り合う。このうちわは雷難・火難・豊作・病氣・安産・産児の健康など諸願意の如くならざるはなしといわれ、安産のお守りや、田の水口に挿して虫除けとして用いられる。

金峯山寺蓮華会・蛙とび行事

◎吉野郡吉野町吉野山

日時Ⅱ七月七日 場所Ⅱ金峯山寺

桜の名所吉野山の金峯山寺では、七月七日に蓮華会が行われる。本堂である蔵王堂本尊に、大和高田市奥田の蓮池で採られた蓮の花を供え、翌八日に大峯山中の各所にも花を献じる行事である。この法会には着ぐるみの蛙が登場するので一般には蛙とびと呼ばれて親しまれている。

七月七日午前、役小角の母が住んだとされる大和高田市奥田で、山伏や信徒たちが見守るなか、船に乗って蓮の蕾が切り取られ、大護摩供が行われてから吉野山に運ばれる。同日午後には蛙の乗った布団太鼓に迎えられて、蓮取りの一行は蔵王堂に入り、内陣祭壇に蓮華が供えられる。その後、願文奏上・法華懺法・繞堂・供華・散華とすすめられ、終わると堂外の仮設舞台（もとは堂内）で、蛙が跳びながら大導師（管長）や吉野一山の僧の前で経文の読誦を受け、最後はもとの人間の姿に戻る。

十津川の大踊り

◎奈良県吉野郡十津川村小原・武蔵・西川地区

日時Ⅱ八月十三日（小原）・十四日（武蔵）・十五日（西川）

小原では八月十三日に大字の主催により、地元の小学校校庭で盆踊りが行われる。小原の盆踊りは数多いが、「馬鹿踊り」と「口説き」と「大踊り」がある。なかでも最も重要視されるのが「大踊り」で、男女が横に三、四列に並び、前方には男が太鼓打ちと太鼓持ちに別れ、女は扇を持って後ろに控え、さらに灯籠持ちが加わる。笹竹に切り灯籠を吊り下げ、白赤緑の紙の房を長く垂らす。初めはゆったりとその場で足踏みをし、後半のセメに入ると太鼓打ちは灯籠と同色の房付きのバチを振り上げて、太鼓持ちの支える締太鼓を打つ。女性は周囲を取り囲んで頭上で扇を振る。大踊りには仮装が出る。土地で「化ける」といい、顔を隠して農作業や山仕事の格好などをする。

武蔵では八月十四日夜に、青年会と婦人会の共催で、旧小学校の校庭で盆踊りがある。武蔵では、踊りやすい曲から始めて、口説きなどに移る。「大踊り」は最後近くに踊られる。踊りは小原のものと似て、男は太鼓打ちと太鼓持ちに分かれ、女は襷を掛けて扇を手にし、さらに笹竹に

切り灯籠を吊り下げた灯籠持ちが出る。大踊りは男女掛合で歌われる。初めはゆったりとその場で足踏みをし、途中「なむあみだぶつ」の聲が掛かるとこれを合図にセメに入り、次第にテンポが速くなる。襷姿の女性はそれまでの横列から円陣を作り、その内側で太鼓打ちは房の着いたバチを振り上げ、跳ねるようにして太鼓を打つ。踊りの場は一気に高揚し、「弱い奴はまくりだせ！、ヨッサヨッサヨッササイ！」の掛け声とともに最高潮に達する。

十津川の支流西川筋でも、八月十五日には西川地区全体の催しとして重里の西川中学校の校庭で盆踊りが催される。西川の踊りは今も櫓を組まずに踊られる。西川地区にはイリハ・カケイリ・ヨリコと大踊り三曲を伝える。イリハは男が締太鼓を胸に吊り、先を赤く染めた長い房を付けたハチ（桴）を振りながら踊る。ヨリコは、踊りの場に人を寄せるための踊りで、昔は一番初めに踊ったという。男女が三、四列に並んで、全体がそのまま右に旋回するダイナミックな動きを見せる。このヨリコに灯籠持ちが加わったものがカケイリで、盆踊りの最後の晩にだけ踊られる一番の呼び物であった。大きく一度廻ってからセメに入り、終わると横列の隊形を解いて、円形となり即興で踊

る。

大柳生の太鼓踊り

◎奈良市大柳生町 西側垣内・上出垣内・塔阪垣内

日時Ⅱ八月十七日

奈良市の東部の山間大柳生町では、毎年八月十七日にガトウの太鼓踊りとも呼ばれる太鼓踊りが行われる。

大柳生地区には素盞鳴命を祀る夜支布山口神社があり、この分霊といわれる「廻り明神」を宮座の年長者が座入り順に当屋となつて自宅で丁重に祀るしきたりがある。この当屋の前庭で明神に奉納する形式で太鼓踊りが行われる。カンコ（鞆鼓）を胸に吊り、桧の削り皮を束ねたシナイを背負った中踊り八名、大きな御幣を背負った大太鼓四名と歌あげ、笛、鉦ほかで一組となる。「道中いりは」で踊りの場に練り込み、場所取り・打ち込みを経て、大太鼓の上に登つて「口上」を述べてから、大太鼓役は左に廻りながら交代で太鼓を打ち、中踊りはカンコを打ちシナイを振りながら踊る。

県内であつて広く踊られていた太鼓踊りは、雨

乞いやその願満の際に踊られ、イサミ踊りやナモデ踊りとも呼ばれていたが、大柳生の太鼓踊りは、戦役の凱旋に踊ったものであると伝えられる。毎年踊られる県内唯一の太鼓踊りである。

曾爾の獅子舞

◎宇陀郡曾爾村

日時Ⅱ十月体育の日の前日 場所Ⅱ門僕神社

三重県と境を接する奈良県東北部の曾爾村には、伊勢太神楽系の獅子舞が伝承されている。同村九大字のうち、八大字は門僕神社を産土神として信仰し、そのうち中心部の今井と長野、北部の伊賀見の三大字には青年による獅子舞の組を持っている。

祭り当日早朝から、各大字の当屋などが神社に集まり、榊の葉を口にくわえて献饌を行う。神饌の中にはズイキの芯の周囲に柿や餅を竹串で飾り、上部に鶏頭の花を挿した人身御供の替わりと伝えるスコがあり、このオスコアゲが始まる頃から獅子舞が始まる。拝殿前で三大字がそれぞれ鈴と御幣を採つて「神前の舞」を舞った後に、下の広庭で交代しながら「悪魔祓い」（剣）、「参神楽」（鈴・御幣）、「獅子踊り」（天狗・オカメ・ヒョッ

トコが登場）、「接獅子」（獅子頭を被る少年が、青年の肩の上に立ち、剣の舞や花魁道中の様を演じる）などを舞い、最後に合同で「荒舞」を舞う。獅子は二人立ちでマエとアトモチに分かれ、囃子は太鼓・笛・スリガネ（チャンギリ）からなる。神社以外では、周辺の家々を巡る「荒神祓い」や当屋宅で舞うトーヤマワシも行われる。

題目立

◎奈良市上深川町

日時Ⅱ十月十二日 場所Ⅱ八柱神社

奈良市上深川では、氏神八柱神社の宮座行事として、十月十二日の宵宮祭に、新たに宮座入りしたかぞえ十七歳の若者が題目立という語り物芸を奉納する。

題目立の起源については明らかでないが、地元には伝わる享保十八年（一七三三）書写の台本には、寛永元年（一六二四）頃の片仮名書きの台本を書き改めた旨が記され、江戸時代初期には、すでにこの芸能が演じられていたことがわかる。

十二日当日、本殿下の庭に正面二間、奥行二間半ほどの地を二重の竹柵で囲い、藁むしろを敷いて、中央に板敷きを置いて舞台を作る。夜七時

半頃、神社に隣接する元薬寺で若者たちは装束を整え、「ミチビキ」を歌いながら長老に導かれて舞台上上がる。参籠所の番帳指し（呼び出し役）から呼び出しを受けて、台詞の順番と役名が告げられ、これに応えて抑揚のある口調で、順に名乗りをあげて物語を語り始める。奉納が終わると祝言の意味を持つ入句を歌い、舞台から元薬寺へ戻る。

曲目としては、源平合戦の武将を扱った「厳島」「大仏供養」「石橋山」の三曲が伝わるが、現在は前二曲が一年交代で演じられている。演者は観客に背を向けたままで、あくまで奉納の姿勢が貫かれており、この役を済ませて一人前の村の構成員と認められるという成人儀礼の意味合いを持つっているのも特色である。

春日若宮おん祭

◎奈良市春日野町

日時Ⅱ 十二月十五日～十二月十八日

場所Ⅱ 春日大社

若宮社の例祭であるおん祭では、神と人の御旅所への移動（遷還幸）とそこでの華麗な祭り（御旅所祭）が行われる。この祭りの第一の特色はま

ず「芸能による祭り」という点である。第二には、

今は春日大社を中心に多くの人々の協力で行われているが、かつては春日大社の西、藤原氏の氏寺興福寺が主催した「寺院による祭礼」であった。興福寺は寺院であると同時に世俗権力としてその下に国内の武士団を組織し、春日の神威を背景として大和一国を支配したので、おん祭は大和随一の大祭となった。さらに第三の特色としては、祭りの多くの場面で稚児が重要な役割を果たしていることである。流鏑馬の児、頭屋の児の他、現在大人が勤める日使ももとは子供が勤めていた。おん祭は「稚児による祭」と呼べる側面を持っていた。それが若宮という御子神を祀るのに最もふさわしい方法だと考えられたからであろう。

《縄棟祭・十月一日》

おん祭の御旅所（春日大社一の鳥居の東、もと興福寺領東松原）の仮御殿を作る起工式が縄棟祭。奈良市大柳生の片岡家が代々奉仕し、松と縄を用いて仮御殿の建つ場所を囲い、祭典を執り行う。このあと十二月頃から原初の春日造とされる仮御殿が作られる。

《大宿所祭・十二月十五日》

奈良市餅飯殿町にある大宿所は、かつておん祭を支えた大和の武士団が身を清めて、祭りの準備のために泊まり込んだ参籠所である。ここで御渡りに用いられる大きな作り物の野太刀などの武具や華やかな装束が披露される。境内では「懸物」といって供物の鮭や鯛や雉子が掛け並べられ、湯の力で人々の汚れを祓う湯立行事も行われる。

《宵宮祭・同十六日》

深夜の遷幸の儀の前に、神前に「御戸開きの神饌」を献じて祭礼の無事執行を祈る。午後二時から、大和武士の末裔達が流鏑馬児とともに宵宮詣を行い、三時からは、田楽座が本社と若宮社を参拝し、田楽芸を奉納する。

《遷幸の儀・同十七日》

夜十時半頃から十一時半にかけて出御を促す案内が三度繰り返された後、深夜午前零時に、若宮の神は出御される。灯火をすべて消し去り、暗闇の中を松明の火が参道を清め、沈香の香りが漂うなか、神霊を捧持した宮司の周囲を、櫛を手にした多勢の神職が何重にも取り囲み、警

蹕を発しながら山を下り御旅所まで神幸する。

《暁祭・同十七日》

午前一時頃、若宮神が仮御殿に入御すると、御殿の前に松が立てられ、瓜灯籠が掲げられ、供物が献じられる。さらに宮司が祝詞を上げ、社伝の巫女神楽が厳かに舞われる。

《御渡り式・同十七日》

正午から祭礼に加わる人々や芸能を演じる人々は、華やかに着飾り千人近くの行列を作って御旅所へ向かう。おん祭の御渡りは風流行列であり、社参の行列である。興福寺南大門前では交名の儀という名乗り（点呼）の式をする。御旅所手前の「影向の松」（春日大明神が翁の姿で現れ、舞を舞ったという伝説のある場所）では、芸能集団はひとくさりその芸を披露する（松の下式）。この後参道では稚児による流鏑馬が行われる。

《御旅所祭・同十七日》

社参行列が御旅所に練り込むと午後二時半頃から御旅所祭が始まる。奥には若宮神が静まる仮御殿、左右には鼙太鼓を据え、中央には芝舞台がある。染御供などの色とりどりの美しい神

饌が供えられ、夕刻から社伝の巫女神楽、少年達の舞う東遊、平安時代以来熱狂的に人々に喜ばれた田楽、日本で唯一の神秘的な細男の舞、さらに猿楽や数々の舞楽が夜中の十時半頃まで演じ続けられる。最後の舞楽「落躑」が終わると灯火が消され、若宮神は今度は御旅所から若宮社まで同じ道を戻られ、午前零時前には本殿に鎮まられる。

《奉納相撲後宴能・同十八日》

翌日御旅所南側の特設土俵で勝抜き相撲が行われ、若宮神が還御された後の芝舞台では後宴能が演じられる。

※万燈籠と燈花会ほか

奈良の夏の行事としては、伝統的な行事と新規の「光系イベント」がある。

古くからの代表的なものとして、春日大社では節分と中元に神前に火を献じる万燈籠が行われる。八月十四日と十五日の両日に、境内の約三千基といわれる石灯籠や釣灯籠に燈明が献じられて、ふだん見られない幻想的な光景が社頭に浮かび上がる。

東大寺では、八月十五日に大仏に灯籠を供え

る万灯供養が行われる。盆に帰省できない人も先祖の供養ができるようにと、昭和六十年に始められたものである。当日は大仏殿正面の観相窓が開かれ、光に浮かび上がった大仏を拝することができる。

八月二十三日と二十四日の地藏盆には奈良町の各町内で地藏が祀られるが、元興寺の境内では、昭和六十年に境内や周辺の五輪塔、供養塔を集めて修景して作られた浮図田の至るところに燈明が献じられる。

こうした神仏に燈火を献じる伝統の行事のかたわらで、近年注目を集めているのが、奈良公園一帯をろうそくの灯でライトアップする燈花会である。平成十一年から始められた誘客のための新しい「光系イベント」であるが、次第にその地域が広がるとともに、人々の素朴な祈りを込めた行事となりつつある。

その他の主な祭りや行事

一月成人の日の前日

若草山焼…若草山

東大寺の東側の若草山を焼く行事。春日大社、興福寺、東大寺の境界争いに端を発するといわれる。全山が炎に包まれ、背後の漆黒の闇に大火花が浮き上がる写真で知られる野焼き行事である。

一月二十三日

癌封じささ酒祭り(光仁会)…大安寺

桓武天皇が父帝である光仁天皇の御忌を大安寺で営んだという「続日本紀」の故事に由来する。太い竹筒に入れた酒を青竹の盃で受ける。さ酒は、癌封じに薬効があるという。

二月三日

追儼式(鬼追い式)…法隆寺

法隆寺西円堂の修二会結願の夜、鬼追い式が行われる。黒鬼(父鬼)・青鬼(母鬼)・赤鬼(子鬼)が現れ、その後、毘沙門天が鉾をもつて登場し、鬼を追って堂周りを三周する。

二月三日

節分会、鬼火の祭典…金峯山寺

本堂の蔵王堂で営まれ、内陣に現れる赤・青・黒の鬼を追ひ払うときに、「福は内、鬼も内」という掛け声で豆をまく。

節分の日

追儼式(鬼追い式)…興福寺

まず六匹の鬼が現れ、やがて堂内から鉾をもつた毘沙門天が現れ、法力で退散させた後、大黒さんが打ち出の小槌を持って登場、参拝者に福を授ける。続いて「福は内、鬼は外」のかけ声とともに、参拝者に「興福豆」の福豆まきが行われる。

節分の日

節分柴燈護摩会…元興寺

本堂に遷座した不動明王を供養し、続いて境内で山伏による柴燈護摩供が修される。その後、「火渡り」と「豆まき」が行われる。

二月十一日

砂かけ祭…廣瀬神社

午前中の神事に続き、午後からは拝殿前に青竹

を四方に立て、田圃に見立て、その内にて田作りの作業を行う。この農作業を行う田人(百姓)・牛と参詣者とは砂のかけ合いをする。砂を雨に見立て、激しくかけ合う程その年は水に恵まれ、豊作になるといわれている。

二月十四日

だだおし…長谷寺

修二会結願の法要として、十一面観音悔過法要を行ったのち、鬼面加持をしてから、松明に先導された鬼が三匹、本堂周囲を三周する。

三月三十日～四月五日

花会式(修二会)…薬師寺

本尊薬師三尊の前で修せられる修二会。十種の造花が本尊の前に飾られるところから、花会式と呼ばれる。五日の結願には鬼追式が行われる。

四月一日～七日

雛会式…法華寺

本尊十一面観音像の前に、高さ三〇センチほどの善財童子像を祀る。供物を献じて、毎日梵網經講讀・法華經講讀を厳修する。

四月八日

おたいまつ(修二会)：新薬師寺

本尊の薬師如来に滅罪、厄除けを祈願する行法で、天平時代より続く。午後七時から七時余の大松明十一本を奉納し、本尊の前で神名帳が読み上げられる。

四月第二日曜日とその前日(秋は十月第二日曜日)

大茶盛式：西大寺

西大寺の僧がたてた抹茶を、直径三〇～四〇センチの大きな茶碗で廻し飲みをする。鎌倉時代叡尊が鎮守社での祈禱の後に湯茶の振舞いをしたのが始まりとされる。

四月十日～十二日

花供饗法会(花供会式)：金峯山寺

桓武天皇の御病の平癒を祈禱した高算上人に米の喜捨が許された。その故事から米を千本杵でついて餅つきをし、それを蔵王権現に献じ、その後、境内で餅まきを行う。

四月二十一日

釜ノ口れんど(弘法大師大法会)：長岳寺

弘法大師の御影供が修せられ、その後、本堂

の広場で柴燈護摩供養を行う。修験者達により、行者問答、法弓作法、法斧作法などが本式に行われる。

五月三日

久米寺練供養(久米れんど)：久米寺

金堂で大般若経の転読の法要が営まれたのち、金堂と護国道場との間に橋がかかけられ、二十五菩薩が金堂までお練りをする。

五月三日

大峯山戸開式：大峯山寺

午前三時に鍵渡し儀式をしてから、鍵をもつ信者が掛け声をかけて境内を練り歩き、夜明けとともに本堂の戸を開ける。戸閉式は九月二十三日。

六月十三日

黄金ちまき会式：弘仁寺

かしの葉で結んだちまきを本尊に供えて、自然の恵みと健康などを祈る会式。ちまきには、家内安全、無病息災の功德がある。

六月十七日

三枝祭(ゆり祭)：率川神社

笹ゆりが供えられるので一般にゆり祭と呼ばれる。神社から百合神輿や七媛女・百合姫などの時代行列が奈良市内を練り歩く。

六月三十日

神剣渡御祭(でんでん祭)：石上神宮

石上神宮から境外末社の神田神社へ、神剣を奉持してお渡りする祭り。「デندن」と太鼓をうったので、でんでん祭とも呼ばれる。

七月第一日曜日

風鎮大祭：龍田大社

天候の恵みによる五穀豊穡を祈り、特に暴風洪水が起らないことを祈願する。午前中に祭典があり、午後からは神賑の行事が催される。

八月七日

大仏さまお身拭い：東大寺

年に一度、盧舎那仏(大仏)の体を拭い清める行事。朝早くから白装束の僧侶たちが大仏にとりつき、一斉にほこりを落とす。

八月十五日

大文字送り火…高円山

昭和三十五年から始められた観光行事。飛火野で祭典が行われたのち、高円山に「大」の字が浮かびあがる。

仲秋の名月の日

采女祭…采女神社(奈良市樽井町)

天皇に寵愛されながら翻心により嘆いて猿沢池に身を投げたとされる采女を祀る采女神社の祭礼。秋の七草を飾った花扇や十二単衣の花扇使いなどの行列が市内を練り歩く。夜にはこれらを乗せた龍頭船が猿沢池を廻る。

十月中の土・日・祝日

鹿の角きり…鹿苑(奈良市春日野町)

寛文十二年(一六七二)、牡鹿の角による危険防止のために始まった。一回に五、六頭の牡鹿を角きり場に入れ、勢子によって取り押さえられ、のこぎりで角をきり落とす。

十一月三日(春は四月二十九日)

けまり祭…談山神社

中大兄皇子と藤原鎌足が、蹴鞠に託して大化

の改新を図ったという故事に因んで行われる行事。神廟拝所と総社の間の庭で蹴鞠が披露される。

十二月第一日曜日

いのこの暴れまつり…桜井市高田

ネムノキで小型の農具をつくり、竹で作った二対四方のお飯屋に吊る。午後からは、子供がこの農具を奪い、食事のとき膳、椀などをほうり投げ、藁を投げてご神灯を消すなどの各種の「暴れ」がある。

十二月二十九日

お身拭い…薬師寺

午前中に正月用の餅をつき、その時に使用したお湯を使って、薬師如来像、日光菩薩像、月光菩薩像を浄布で拭き清める。

文学

万葉の故地

奈良は、元明天皇の和銅三年（七一〇）三月十日、藤原京から遷都して以来、一時、聖武天皇の天平十二年より十七年にかけて、恭仁・難波・紫香楽への造京遷都のことがあったものの、桓武天皇の延暦三年（七八四）十一月までの、八代七十四年の間帝都の営まれた地である。万葉集の最終歌は、天平宝字三年（七五九）正月一日の因幡国庁での大伴家持の宴歌（巻第二十、四五―一六番（以下②④五―一六と表す））であるから、万葉の時代に限っても四十九年間の長きにわたっており、それゆえ、奈良市だけで延べ約二百五十におよぶ万葉地名が数えられ、県下の全万葉地名数の四分の一を越える。

平城京

平城京を詠った万葉歌としては、

大宰少貳小野老朝臣の歌一首

あをによし 奈良の都は 咲く花の

にほふがごとく 今盛りなり

（③三二八）

（あをによし）奈良の都は、咲く花が爛漫と咲き誇るように、今真つ盛りでした。

が有名であるが、題詞に「大宰少貳小野老朝臣の歌」とあるように、九州大宰府（福岡県太宰府市）で都を思つて詠った歌である。「奈良」の語をもつ歌五十一首中、「奈良の都」と続く歌は二十一首。そのほとんどが奈良以外の地で詠まれたものであり、都への望郷の思いや、恭仁京遷都後の都の荒廃への嘆きを詠ったものである。

三笠山

春日山の主峯の前面西方にある円錐形の御蓋山（二九七㍎）。俗にいう三笠山（若草山）とは別。春日山の一峰で、西麓に春日大社があり、その境内には万葉植物園が設けられている。山の形が天皇のかざす衣笠に似ているので「み笠」という。

衛門大尉大伴宿祢稲公の歌一首

しぐれの雨 間なくし降れば 三笠山

木末あまねく 色付きにけり

（⑧一五五三）

しぐれの雨が絶え間なく降るので、三笠山は梢がすっかり色づいてしまった。

大伴家持が和ふる歌一首

大君の 三笠の山の 秋黄葉

今日のしぐれに 散りか過ぎなむ

（⑧一五五四）

（大君の）三笠の山のもみじ葉は、今日の時雨で、散つてしまふのではないだろうか。

佐保川

春日山の山中に発し、若草山北麓を迂回して、佐保を西流し、吉城川をあわせ、奈良市庁の東方で南折し、途中、率川・能登川をあわせ、初瀬川に合して大和川に注ぐ川。

佐保川の 岸のかさの 柴な刈りそね

ありつも 春し来らば 立ち隠るがね

（④五二九）

佐保川の岸の高みの柴は刈らないでくれ。このままにしておいて、春になったら、隠れて逢瀬を楽しむために。

右は、大伴坂上郎女の旋頭歌（五七七 五七七の六句形式の歌）。春の佐保川河畔は、柳青葉も美しく、万葉人のデートスポットでもあった。次

の作者未詳歌に見られるように、当時の佐保川は河鹿のすむ清流であり、佐保川に鳴く千鳥『万葉集』に八首詠まれているは平城京の人々に親しまれた。

鳥を詠む(三首のうちの一首)

佐保川の 清き川原に 鳴く千鳥

かはづと二つ 忘れかねつも (⑦一一二三)

佐保川の、清らかな川原に鳴く千鳥は、河鹿蛙とともに二つ、いつまでも忘れられない。

生駒山

生駒市および生駒郡と東大阪市との間に連なる山(六四二^{メートル})。万葉時代、南の竜田越えとともに、生駒越えは大和から河内に通ずる交通路であった。山頂の北に善根寺越え、辻子越え(日下直越)があり、南に暗峠越えがあるが、当時の主要路はどれか明らかでない。和銅五年(七一二)から暗峠の北方の高見と奈良市の春日に烽(のろし)を置き、有事の際に平城に通じさせた。

田辺福麻呂歌集には、「奈良の故郷を悲しびて作る歌」として「……露霜の 秋さり来れば 生駒山 飛火が岡に 萩の枝を しがらみ散らし 雄鹿は つま呼びとよむ……」(⑥一〇四七)と生

駒の飛火が岡が詠まれている。

妹がりと 馬に鞍置きて 生駒山

うち越え来れば 黄葉散りつつ (⑩二二〇一)

妻の許へと、馬に鞍を置いて、生駒山を越えて来ると、もみじが散っている。

夕されば ひぐらし来鳴く 生駒山

越えてそ我が来る 妹が目欲り(⑮三五八九)

夕方になるとひぐらしが来て鳴く生駒山を、越えて私はやつて来たよ。妻に逢いたく思つて。

泊瀬

桜井市脇本・出雲・初瀬など初瀬川流域の地で、宇陀市榛原区の一部を含む地域。大和川から泊瀬川を遡る水運の「泊つる瀬」ということで、「泊瀬」と書き、また東西に長い峡谷状の地形であることから「長谷」とも書く。「隠口の」の枕詞もこの地形による。大和から伊賀、伊勢に行く、いわゆる伊勢街道に沿った地である。

こもりくの 泊瀬の国に さよばひに 我が来れば

たな曇り 雪は降り来 さ曇り 雨は降り来

野つ鳥 雉はとよむ 家つ鳥 かけも鳴く

さ夜は明け この夜は明けぬ 入りてかつ寝む

この戸開かせ (⑬三三二一〇)

(こもりくの)泊瀬の国に妻問いにわたしが来ると、一面にかき曇つて雪が降つて来る、暗く曇つて雨が降つて来る。(野つ鳥)雉はけたたましく鳴くし、(家つ鳥)鶏も鳴く。夜は白みはじめ、とうとうこの夜は明けてしまった。中に入つてまあ寝よう。この戸を開けておくれ。

こもりくの 泊瀬小国に 妻しあれば

石は踏めども なほし来にけり (⑬三三二一一)

(こもりくの)泊瀬の小国に妻がいるので、石を踏むような難儀な道だけれども、なおも私はやつて来たことだ。

阿騎野

宇陀市大宇陀区あたりの山野。いま市街の西方の迫間に式内社阿紀神社がある。この付近から大宇陀区一帯、榛原区にかけての山野である。

東の 野にかぎろひの 立つ見えて

かへり見すれば 月傾きぬ (①四八)

東方の野に、曙光の立つのが見えて、振り返つて

見ると、月は西に傾いている。

山の歌

日並の皇子の尊の馬並めて

み狩立たしし時は来向かふ (①四九)

日並の皇子の尊が、馬を並べて、狩にお立ちになった、その刻限は今まさに到来した。

日並皇子とは、天武天皇と持統天皇との間に生まれた草壁皇子のことである。皇子は持統三年（六八九）四月十三日に薨去。歌は草壁の遺児軽皇子（のちの文武天皇、この時わずか十歳）が阿騎野に狩に出かけられた時の人麻呂の作である。いま迫間に「かぎろひの丘万葉公園」があり、佐佐木信綱揮毫の「東の野にかぎろひの立つ見えて……」の歌碑が立つ。丘の上からは連なり重なる山々が一望でき、遙か万葉のロマンを求めて、旧暦十一月十七日には「かぎろひを観る会」が催されている。

大和三山

橿原市に所在する。藤原京を中心として、東に位置する香具山、西に位置する畝傍山、北に位置する耳成山の三つの山をいう。

中大兄 近江宮に天下治めたまふ天皇の三

香具山は 畝傍を惜しと 耳梨と 相争ひき

神代より かくにあるらし 古も 然にあれこそ
うつせみも 妻を争ふらしき (①一三)

香具山は、畝傍山を奪われるのが惜しいと、耳梨山と争った。神代の昔からこうであるらしい。古もそうだったからこそ、今の世の人も、妻を奪いあつて争うらしい。

反歌

香具山と 耳梨山と あひし時

立ちて見に來し 印南国原 (①一四)

香具山と耳梨山とが争った時、阿菩の大神が立つて見に來た、印南野よ。

わたつみの 豊旗雲に 入り日さし 今夜の月夜

さやけかりこそ (①一五)

海原の豊旗雲に、入日がさしている、今夜の月は、さやかに澄んだ月であつて欲しい。

いわゆる三山の妻争い伝説をもとにした歌。今あることを「神代」からのこととして説明するのは神話や伝説の発想形式である。三山の性については諸説あり、「雲根火雄男志（畝傍ををし）」の解釈も、「畝傍山が雄々しい」とする説がある。その

場合、畝傍山が男山となるが、「惜し」説によれば男山である香具山と耳梨山とが女山である畝傍山を争ったことになり、古代人が好んだ複数の男性が一人の女性を争う妻争いの型と同型式となる。

天の香具山

古事記に「阿米能迦具夜麻」とあつて、「天」は「アメ」とよむ。『伊予国風土記逸文』に天から降つてきた山という伝説があり、この山だけ「天の」を冠らせるのは、神聖な山と考えられていたため。

天皇の御製歌

春過ぎて 夏來るらし 白たへの

衣干したり 天の香具山 (①二八)

春が過ぎて、夏が來たらしい。真っ白な衣が干しである。天の香具山に。

明日香（飛鳥）

高市郡明日香村飛鳥を中心とする一帯の地。広くは、桜井市・橿原市および高取町の一部分を含めることもあるが、普通は明日香村・島庄・橘より北、香具山南麓辺りまでの、主として飛鳥

川右岸の地域をさす。持統天皇八年（六九四）の藤原京遷都まで、舒明・皇極・斉明・天武・持統の諸天皇の宮の営まれた地であり、長い間にわたって政治・文化の中心であった。

明日香宮より藤原宮に遷居りし後に、志貴

皇子の作らす歌

采女の袖吹き返す 明日香風

都を遠み いたづらに吹く

（①五一）

采女の袖を吹き返す明日香風は、都が遠のいたので、むなしく吹いている。

長屋王の故郷の歌一首

我が背子が 古家の里の 明日香には

千鳥鳴くなり つま待ちかねて

（③二六八）

あなたが移って行って古家が残る古里明日香では、千鳥が鳴いています。連れ合いを待ちかねて。

明日香川

高市郡明日香村畑の山中に発して、稲淵山の西麓を廻り、細川をあわせて、甘樫丘の東北を廻り、藤原京跡を経て大和川に注ぐ川。

明日香川 川淀去らず 立つ霧の

思ひ過ぐべき 恋にあらなくに （③三二五）

明日香川の川淀を離れずに立つ霧のように、すぐ消え失せるような恋ではないのだ。

山部赤人が明日香の神なび山に登って作った長歌の反歌である。長歌は明日香古京への讃美と愛惜の思いが詠われており、「思ひ過ぐべき恋」は

明日香への思いである。

明日香川 瀬々に玉藻は 生ひたれど

しがらみあれば なびきあへなくに（⑦一三八〇）

明日香川の瀬ごとに玉藻は生えているけれども、しがらみが邪魔をするので、なびき寄ることができない。

明日香川には、川の流れを堰き止めるために杭に竹や木の枝を絡ませた「しがらみ」が設けられてもいた。「玉藻」に女性、「しがらみ」に逢瀬を妨げるものを譬えた歌である。

二上山

葛城市當麻にある山。葛城山地の北のつづきにあたり、大和・河内の国境をなす。いま「にじょうさん」という。北の雄岳（五一七メートル）、南の雌岳（四七四メートル）の二峰にわかれ、雄岳の山頂に大津皇子の墓がある。

うつそみの 人なる我や 明日よりは 二上山を弟と我が見む （②一六五）

この世の人である私は、明日からは、二上山を弟として見るのであろうか。

磯の上に 生ふるあしびを 手折らめど

見すべき君が ありといはなくに （②一六六）

岩の上に生えているあしびを手折ろうとはするけれど、見せるべき弟がこの世にいるわけではないのに。

天武天皇と天智天皇の息女である大田皇女との間に二人の子供が生まれた。姉を大伯皇女といい二歳違いの弟を大津皇子という。不幸なことに大田皇女は大津が五歳の天智天皇六年（六六七）頃に死去した。皇子は祖父にあたる天智天皇に愛されて育ち、風貌逞しく、文武両道にすぐれ人望の厚い人物であったという。一方、天武天皇と大田皇女の同母妹である鸕野皇女との間にも草壁皇子が生まれた。壬申の乱後鸕野は皇后となり、草壁はやがて皇太子となったが、草壁は大津に比べ凡庸な人物であった。天武天皇崩御後の朱鳥元年（六八六）十月二日、大津は謀叛の罪で捉えられ、翌日処刑された。この歌は、

一旦埋葬された大津皇子の屍を二上山に移葬した時、大伯皇女が哀傷して作った歌と題詞に伝える。

巨勢・巨勢山

巨勢は御所市古瀬を中心とした重阪川（曾我川上流）流域の一带で、大和から紀伊および吉野への通路にあたる地である。巨勢山は巨勢の峡谷の東西の山地をさすものであろうが、吉野口駅西北の式内社巨勢山口神社のある標高二九六^八の山を、いま巨勢山と称している。

巨勢山の つらつら椿 つらつらに

見つづ偲はな 巨勢の春野を (①五四)

巨勢山のつらつら椿を、つらつらと見ながら偲ぼう。巨勢野の春の野の光景を。

右の一首は、大宝元年（七〇一）秋九月、太上天皇（持統上皇）が紀伊国に行幸した時、坂門人足が作った歌である。椿の花の咲く時期ではないが、名高い巨勢の椿花咲く春野の景を偲ぼうというのである。

吉野

吉野郡の地であるが、『万葉集』では、主として、

吉野離宮のあつた宮滝を中心とした一帯をさす。応神天皇以来、聖武天皇までしばしば行幸があり、斉明・天武・持統など各天皇の離宮もここにあつた。中でも持統天皇の行幸は在位中三十一回におよんだ。「み吉野」のミはほめ詞。接頭語ミを地名に冠するのは、万葉では「吉野」「熊野」「越」に限られる。異境であり神聖な地と考えられたからである。

み吉野の 耳我の嶺に 時なくそ 雪は降りける
間なくそ 雨は降りける その雪の 時なきがごと
その雨の 間なきがごとく 隈もおちず

思ひつづぞ来し その山道を (①二五)

み吉野の耳我の嶺に、止む時なく雪は降っていた。絶え間なく雨は降っていた。その雪の止む時もないように、その雨の絶え間もないように、道の曲り角ごとにずっと思いながら来たのだ、その山道を。

天皇、吉野宮に幸す時の御製歌

淑き人の 良しとよく見て 良しと言ひし

吉野よく見よ 良き人よく見 (①二七)

昔の淑き人が、よい所だとよく見て、よいと言った、この吉野をよく見よ。今の良き人よ、よく見よ。

前者は、壬申の乱をむかえる前、天智天皇の後継を辞退して、吉野に出家隠遁した時のことを歌った天武天皇の御製。後者は、天武天皇八年（六七九）五月五日に吉野に行幸した時の天皇の御製歌である。吉野は天武朝においては、壬申の乱の勝利の原点の地であり、聖地であつた。その聖地吉野をよく見ることは、目のもつ力によってその聖性を身に取り込むことである。以来、吉野は人々にとって、見られるべき聖なる地と意識されることとなる。

近代文学の舞台

風土

志賀直哉は大正十四年（一九二五）に奈良幸町へ移住。昭和四年（一九二九）には新薬師寺に近い高畑に家を新築して、同十三年に東京に去るまでの十四年間に奈良で過ごした。志賀は青年期以来各地を転々と移り住み、高畑の新居は十八回目の引越しだったが、それまでは全て借家住まいであり、この高畑が志賀にとつての初めての持ち家だった。さらには東京移住を決意した後にも「矢も盾も堪らず、奈良に帰りたくなるのは不思議な位だ」と心境を随筆『奈良』に綴っている。一体何が志賀をしてここまで奈良に執着させたのだろうと不思議になるが、同じ随筆の中で、「兎に角、奈良は美しい所だ。残っている建築も美しい。そして二つが互に溶けあっている点は他に比を見ないと云って差支えない。今の奈良は昔の都の一部分に過ぎないが、名画の残欠が美しいように美しい」と言っており、このような風土観に奈良への愛着の因があったように思われる。

独特の詩的な文学世界を築いた堀辰雄もまた奈良を愛した文学者で、昭和十二年（一九三七）から十八年の間に七回も奈良に来ており、

京都府木津川市の浄瑠璃寺周辺の荒廃した様子を『浄瑠璃寺の春』の中で「第二の自然」と評した。この堀の「第二の自然」という視点は奈良の風土にも共通するものであり、志賀の「名画の残欠」と同様に、奈良盆地全域の特徴を言い当てていると言えるだろう。

「西東山にかたよる奈良の秋」「右京左京中は畑なり秋の風」「一條も九條も見えず稲薙」「寒山落木」などは、正岡子規が「柿食へば鐘が鳴るなり法隆寺」の名句を得た明治二十八年（一八九五）十月の奈良来訪時に作った句で、当時の奈良盆地の景観を如実に伝えている。「秋風や皆千年のものばかり」は子規の奈良に対する素朴な感慨でもあったに違いない。また子規の弟子高浜虚子は明治四十年（一九〇七）に法隆寺を訪れ、『斑鳩物語』を残す。そこにはどこまでも続く菜の花畑や梨畑・麦畑など、当時の法隆寺を取り巻く広いのどかな風景が美しく描かれている。「おほてらの まろきはしらの つきかげを つちにふみつものをこそおもへ」（『鹿鳴集』）は奈良を愛し続けた歌人会津八一の歌。奈良県下には八一の歌碑が十基以上あり、この歌は唐招提寺の金堂わきの歌碑に刻まれている。金堂の丸柱のエンタシスは、遙かギリシャの建築様式がシルクロードを経

て伝えられた様式だといわれる。丸柱の月影を見ながら、八一の思いは彼方の古代ギリシャや、ギリシャ文明東漸期の古代奈良に遊んでいたに違いない。実は昭和期に奈良に遊んだ堀辰雄もまた唐招提寺について、『大和路 信濃路』の中で、「此処こそは私達のギリシアだ」（「十月」と記している）。

ところで唐招提寺については何よりも、古代奈良・古代日本の文化にとつて最も重要な文化史上の役割を忘れることが出来ない。仏教は、古代日本にとつて信仰というよりも普遍の真理として受容されたのであり、また近代日本の明治期知識人たちにとつてのキリスト教と同様に、先進文化を満載した船でもあった。聖武天皇はこの真理としての仏教に日本の将来を託すべく、授戒の僧を招こうとし、これに応じたのが鑑真大和上で、唐招提寺はこの鑑真によつて建てられた寺院だ。井上靖の『天平の甕』は、鑑真招聘に関わる苦難を感動的に描いている。

また井上には、シルクロード伝来の器物を描いた小説『漆胡樽』がある。正倉院に何時の頃からか収蔵されている一对の、黒漆をかけた角型の器物。井上靖は昭和二十一年（一九四六）秋の第一回正倉院展でこの「漆胡樽」に出会い、西域の

古代に壮大な想像力を羽ばたかせた。器物「漆胡樽」が中央アジア崑崙山脈の辺りから砂漠のオアシス伝いに漢土に至り、やがて日本にたどり着くという、ロマンに満ちた物語だ。

このように、シルクロードの彼方ギリシャ、ペルシャ、インド等々から様々な文物が流れ着いた古代の奈良の痕跡を包み込む形で、現代の奈良の風土は形成されている。森鷗外は大正時代（七～十一年）に毎年正倉院曝涼に立ち合うべく奈良に来て、「夢の国燃ゆべきものの燃えぬ国木の校倉のとはに立つ国」（『奈良五十首』）と奈良への感動や思いを歌った。古代の文物に満ちた奈良は、鷗外にとって「夢の国」だったのだ。

伝統芸能

奈良には長い歴史過程に紡がれた伝承や伝説があり、伝統芸能に素材を提供している。

広い信仰に支えられた中将姫説話は中世から近世にかけて、能楽の「當麻」や「雲雀山」、御伽草子「中将姫本地」、浄瑠璃「鷗山姫舎松」、義太夫「當麻中将姫」、歌舞伎「中将姫京雛」等々の伝統芸能や文学に昇華し、さらに昭和期には民俗学者折口信夫によって、小説『死者の書』が書かれた。折口は中将姫をモデルとした藤原南

家の郎女をめぐる物語として、古代の姿をまざまざと描き出しており、やや難解ながら鬼気迫るものがある。

文学の花々

他にも文学の花々は多彩に咲き乱れている。東大寺二月堂のお水取りを待つ老女たちの姿をほほえましく描いた『二月堂の夕』の著者谷崎潤一郎は、昭和五年（一九三〇）に奥吉野を旅し、吉野にまつわる南朝・後南朝の哀史や義経と静御前の伝説、「妹背山婦女庭訓」や「義経千本桜」等の芸能を『吉野葛』に取り入れ、幻想的でロマンチックな母恋や妻問の物語に仕上げ、吉野町ばかりでなく川上村や上北山村、下市町、旧西吉野村など広範な奥吉野にも言及している。ほかに吉野郡では明治二十二年（一八八九）の十津川村大洪水による北海道移住と新十津川村建設を描いた川村たかしの『新十津川物語』もある。百年以上もの昔の大洪水ながら、注意して見ると十津川谷には未だに当時の被害の痕跡が残っている。

また平成十六年（二〇〇四）七月に登録された世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」。道を含む世界遺産として特徴的だが、この道は主として

仏教渡来以前の日本固有の信仰である原始的な自然・山岳崇拜に端を発する山岳修験達の道で、この山岳修験の開祖役行者は御所市茅原の人だと『日本霊異記』は伝える。行場大峯山系は今日も修験者達の霊場として崇められ、この役行者を主人公にした壮大な戯曲『役の行者』が坪内逍遙によって製作されている。

二上山についても先の『死者の書』に重要な場所として取り込まれているが、五木寛之もまた、『風の王国』で、頂上に葬られている大津皇子の時代と現代を結ぶ伝奇ロマンとして、二上山を取り込む。

伝統工芸

筆

筆祖は秦の武将蒙恬という。漢字が日本に伝わったのは五世紀の初め。その後、仏教が伝来、奈良時代になると、經典の書写が盛んになった。正倉院には天平の大仏開眼の筆を保存、この筆は南都炎上後の鎌倉開眼にも使用した。

平安時代初期、唐から帰った空海（弘法大師）は毛筆の新しい製法を、坂名井清川に教えた。その子孫は代々、筆作りを継承し、奈良筆の流れを作った。初めてのころの筆は芯に紙を巻く方法であつたから、ずんぐりして雀頭筆と呼んだ。それが和風の書流が普及して、長鋒筆になった。能筆家は鹿毛の弾力、狸の腰張り、羊・馬・兎の毛などもまぜあわせ、柔剛・長短・細太の好みの筆を注文した。筆匠は、やがて今日のような無芯筆を考案した。強弱の毛を組み糊で固め、好みに応じて水を含ませるので、人々は水筆といい普及した。

墨

『日本書紀』によると、推古天皇十八年（六一〇）に高句麗僧の曇徴が、紙墨の製法を日本に伝えたとする。大陸との交流の歴史からみると、もともと早い時期も考えられる。六世紀初め以後、仏教の布教とともに經典の需要を高めた。平安時代初期、空海が墨製法を教えたというが、改良であつたと考えてよい。

奈良墨は、室町時代に興福寺の二諦坊で、たまった灯明のススを集めた油煙墨が起源といわれている。当時は貴重で「油煙」とよび、贈答用にした。織田信長に墨百挺を献上した記録もある。江戸時代になると、朝廷・幕府の御用墨にもなり、京都・江戸・大坂に店を構えるものや、長崎で唐墨を研究した松井元泰らがでた。奈良墨の名声はあがり、「奈良みやげ」に宿屋の主人が、筆とセットにして推奨もしたから、名産の地位は高まった。

一刀彫

素彫りの木彫に金箔や岩絵具で極彩色をほどこした人形。稜角と面を強調する切り味鋭い刀法に特徴をもつ。『大日本名産図会』が「銘物はさつと彫たる奈良人形 これそ春日の作といふべ

し」と紹介するように、「奈良人形」が伝統的な名称。檜材を用いるが、大きな作品には楠や桂、朴なども使う。作品は、春日社の祭神を乗せたところから「神鹿」として尊崇されてきた春日野の鹿、高砂や狸々・熊野などの能・狂言、蘭陵王や万歳楽などの舞楽などに題材をとったものが多い。

奈良人形の成立は、室町時代に遡る。春日若宮社の祭礼（おん祭）に参列する田楽法師が頭上につける花笠の台座と饗応用の島台を飾る小さな人形（尉と姥）がそのはじまりとされる。岡野松寿家の代々は、江戸時代を通じて、よく知られた奈良人形師であつた。また幕末から明治期には、森川杜園が活躍した。

奈良団扇

団扇は、奈良時代の中ごろ春日社の神官が軍器の形になぞらえて作りだしたと伝えるが、おそらく骨太なものに紙を張った洪団扇であつたらしい。室町時代になると、興福寺の僧が今様の団扇を作りだしたとか、奈良町の岩井善助が軍配団扇に似せた団扇を案出したという。その後、豊臣秀吉のころ、透かし団扇が作りだされたと伝えるが詳しくは分からない。しかし、このころから

奈良団扇の名も次第に世に聞こえるようになり、団扇の意匠も紋章や判じ絵、役者の似顔絵を描いたもの、奈良の風物を取り入れた模様を透かし彫りにするなど改良が加えられたらしい。江戸時代には、上品で美しいと贈り物に喜ばれ、六月の土用の入りには奈良奉行が幕府に献上するならわしになっていた。奈良団扇は、奈良晒や刀剣・墨・酒などと並んで南都の特産として名声を博するようになった。

現在、奈良団扇は正倉院宝物の文様などをモチーフとした、いわゆる天平模様や、鹿、五重塔など奈良の風物をたくみに配した名所模様を、五色に色付けした和紙に透かし彫りして仕上げ、一セットにした「五色団扇」などとして知られている。

鹿角細工

奈良の神鹿伝承は有名である。その神鹿の角は、興福寺・春日社のものとして、貴重品であった。鹿角は細工ものにしたが、口伝では安土桃山時代から江戸時代初めころが、いちばん盛んであったという。嘉永二年（一八四九）の『大和国細見図』の「名産」に鹿角細工とある。明治二十八年（一八九五）刊の『大和名処のしるべ』には、鹿

角で作った「煙管筒」「数珠」「刀掛け」「櫛」「簪」などの絵がある。

昭和二十年（一九四五）ごろまで、奈良の角細工ものを専門に売る店もあり、このころから時代の好みもあつて、ブローチ・ペンダント・ループタイ・カフス・帯止めなど現代風の細工ものの他、床の間の置物・籠・箸なども製作するようになった。細工はすべて手作業で、職人は自分用の道具を考案し、作品は「棕の葉」で丁寧に磨きをかけた。

赤膚焼

奈良市西の京の西郊に広がる丘陵地の五条山一帯（奈良市赤膚町）で焼かれる陶器をいう。大和郡山市にも窯元がある。茶碗・水指などの茶器や花生用の花器を主とするほか日常雑器を作る。大きな特徴は、萩焼によく似た白濁色をした萩釉と絵画文様にある。絵画文様は、上絵付といつて釉薬をかけて本焼し、さらに弁柄や緑青などで奈良絵を描き、七〇〇〜八〇〇度で焼成する。奈良絵は、本生譚（釈迦の前世の物語）と仏伝（釈迦の現世の物語）を描いた「絵因果経」による図案というが、明らかではない。かつては登り窯で焼かれたが、近年はガス窯と電気窯が使われている。

江戸後期に活躍したのが奥田木白で、楽焼から京・瀬戸・唐津・高取・織部・備前焼まで手がけ、赤膚焼の名を広めた。萩釉の開発は彼の創意と工夫による。

茶筌

富雄川の上流にある生駒市高山町は、茶筌の里として知られる。茶筌は、茶を点てる竹製の点前道具の一つ。高山では、竹のすべての特質を活かして作るという意味から、「筌」の字をあてる。茶筌も流派によって異なり、竈や囲炉裏の煙で燻されて茶褐色になった煤竹はおもに表千家で、武者小路千家では紫竹（黒竹・胡麻竹）を、白竹は裏千家と遠州流のほか、他の流派でも使われる。初釜用の茶筌には、緑色のままの真竹（青竹）でつくる。薄茶用の茶筌の穂数は多く細いが、濃茶用では腰を強くするために穂数は少ない。

多くの流派で使う白竹（淡竹）の茶筌作りでは、良質の三年生の竹を秋から冬にかけて伐り取り、熱湯で油を抜き、これを約一ヶ月間寒風にさらして乾燥させ、さらに三年ほど寝かせる。大割り・小割り・味削り・面取り・下編み・上編みなどの工程を経て完成するが、子割り穂の内側を小刀で削る味削りの技法だけは、「一子相伝」の秘

伝とされる。

奈良晒

麻の織物で肌ざわりがよく、汗もはじくので、鎌倉期以来、神官や僧尼の衣に好まれてきた。江戸時代初め、清須美源四郎が晒法を改良、徳川家康に誉められ、幕府の保護を受けて販路も拡大した。明暦三年（一六五七）、奈良町の惣年寄が麻布に検査印を押すことになった後、半世紀余が生産の最盛期であった。毎年三十万疋から四十万疋（一疋は二反）の産額で、南都随一の産業といわれた。

原料の青苧（乾燥した麻皮）は山形・秋田などの東北から、北陸からは紬糸にして送られてきた。仲買は賃織りに出し、製品は晒問屋に売り、問屋はそれを晒屋に出した。晒屋は、その織布を藁灰の灰汁で煮て、木臼でつき、何回も灰汁をかけ晴天に乾かした。これで、白く光沢がでて、染めでも美しい上布になる。十八世紀の半ば近くから、越後・近江・能登などの他国布の台頭で、幕末には数万疋と沈滞した。永らく、独占的な立場と名声に馴れて、販路の拡大、品質向上への努力をしなかったからである。

古楽面

正倉院はもとより、東大寺や法隆寺、春日大社などの古寺社には、さまざまな形の仮面が所蔵されている。天平勝宝四年（七五二）の東大寺大仏開眼供養会に奉納された伎楽（呉楽）に使われる崑崙・呉女などの伎楽面、伎楽の後に主流となる舞楽（雅楽）で使われる蘭陵王・納曾利などの舞楽面、そして仏教に関わる菩薩面や追儼面（鬼面）の行道面、さらには翁や乙などの能・狂言面などが各地の寺社に伝存し、大和は仮面の宝庫である。

これらのもつ魅力を広く伝えようと、古面を模刻・模倣し、商品化したのが奈良の古楽面。それは昭和四年（一九二九）に始まった。以前は、線香の粉末・パルプ（和紙を細かくして炊いたもの）・ふのりなどを混ぜあわせて、粘土状にしたものを石膏で作った雌型に型押しして面の原形を作り、これに彩色を施していたが、最近シリコンラバーで作った雌型にポリエステルやエポキシなどの化学樹脂に木粉や石粉を混ぜたものを塗って生地（面の原形）を作り、これに彩色を施して仕上げるこの方が多い。ただし、粘土で原型を作るのは変わらない。

奈良漆器

奈良市内でつくられる漆器をいうが、正倉院漆芸品の意匠や技法・形状に倣ったもの、お水取り（修二会）の食堂作法で練行僧たちに供される二月堂机や練行衆盤（日の丸盆）・春日卓のような、東大寺や春日大社など南都の大寺社に伝わる古い漆芸品を模倣したもの、また中世期に紀州の根来寺で作られたとされる根来塗に似せたもの、これらを総称して奈良漆器と呼ぶ。

その名称の成立は、明治二十一年（一八八八）に遡る。この年、奈良博覧会社は、京都で開かれた関西府県連合共進会に吉田立斎・大西勇斎らの漆器を出品したところ好評を得た。漆芸の産業化をはかるため、同社内に吉田立斎を職工長とする「温古社」を設置し、そこで正倉院漆芸品の模倣漆器を作り、これを奈良漆器と名づけたのであった。

奈良漆器の特徴の一つは、黒漆の地に正倉院宝物の文様に象った夜光貝や鮑貝の貝片を付着する技法で、硯箱や文庫、色紙箱、宝石箱などがある。貝片で文様をあらわす技法を螺鈿といい、これには厚貝と薄貝（青貝）とがある。奈良漆器は薄貝が主流。檜のほか檜と合板を併用した木材素地が多いが、乾漆の素地も使われる。

吉野和紙

大台ヶ原山に源を発して北西に流れる吉野川が、高見川を合して大きく蛇行しながら西に向きを変えるあたりは、かつて国栖郷（吉野町）と呼ばれた地域で、手漉き和紙の里として知られてきた。この国栖郷をはじめ近郷の村落では、主に江戸時代以降、楮皮を原料にして寒冷期に手漉きの上質和紙である国栖紙（宇陀紙とも呼ばれる）や森下紙、それに吉野紙（漆漉紙）などを漉きだして世に聞こえてきた。

紙漉きの始まりは、古代に大海人皇子（のちの天武天皇）が国栖の村人に紙漉きの技を勧めたとか、また別に時期は明らかではないが、国栖の村人が高野山麓の紙漉きの村で製法を習い、その技を持ち帰ったと伝えるが、いずれも確かなことはわからない。しかしながら、十六世紀の末ごろには国栖郷や近郷の村々で製紙原料の楮が栽培されるようになり、文禄四年（一五九五）の『検地帳』には楮畑の記載が見いだせる。江戸中期には、国栖郷を中心に近郷の村々で紙漉き農家は二百戸近くを数えるほどであった。

こうした和紙作りは近代に受け継がれたものの、生活様式の変化や機械製紙による洋紙の進出で和紙の需要は減退していった。和紙作りの伝統は、

いまわずかに吉野町の窪垣内、南大野の村里に受け継がれ、吉野和紙として多様な上質和紙を漉きだしている。

三宝・神具

吉野郡下市町下市で神仏に供えるときに使う三宝（三方）と神具が作られている。原材料は檜材で三方にくり抜きのある台の上に折敷が載せられる。下市の町では木工技術のすぐれた職人がいて、お膳・重箱などの箱物、折り箱、麴蓋などが作られていた。このような技術の集積に裏付けされて三宝や神具が製造されている。

吉野地方の木製品

坪杓子

汁をすくう杓子で、材料は栗の木である。頭部の削り物部分の製作が難しい。かつての生活必需品であり、五條市大塔町篠原と惣谷で大量に作られていた。

曲げ物

曲げ物とは木の板を円形に曲げて作った器で、吉野郡天川村洞川で作られていた。材料は檜材

が使われ、胴を円形に曲げて桜の皮で止めた容器で、飯櫃・弁当箱（メント）、水汲みの柄杓子などが代表的な製品である。

特産品

奈良漬

奈良漬の歴史は古く、平城京長屋王邸宅跡から発掘された木簡に「加須津毛」と書かれたものがある。酒造所でどぶろくの下に溜まる汁粕に塩漬けた瓜などの野菜を漬けたのが起源。室町時代、奈良で清酒が造られるようになると、酒粕を用いるようになり現在の奈良漬の原形ができた。

清酒

酒の歴史は古く、平城京から出土した木簡にも造酒のことが書かれている。長い間濁り酒だったが、室町時代に清酒が造られ、この上が無いと「無上酒」とまで呼ばれた。この清酒を造ったのが正暦寺。日本の清酒の起源はここから始まる。「菩提酛」と呼ばれる酒母は奈良盆地の米、菩提山川の清らかで豊かな水によって生まれた。戦国時代はかなりの量が造られ、武将たちは競って求めたという。武田勝頼を滅ぼした徳川家康を信

長は「南都諸白」でもてなし、秀吉が吉野山で花見の宴を張った時も「南都諸白」。奈良正暦寺の僧房酒は天下一の酒として知られていた。

近年、昔ながらの酒母造りが正暦寺で復活、「菩提もと」を使った地酒が造られている。

大和茶

大和とお茶の結びつきは古く、大同元年（八〇六）、弘法大師が唐から茶の種子を持ち帰り、室生に種を蒔き、製法を伝えたことに始まるという。宇陀市榛原区赤埴の佛隆寺には弘法大師が持ち帰ったという茶臼が伝えられていた。弘仁六年（八一五）には、嵯峨天皇が勅命で大和、山城など畿内で茶を栽培させたということが『日本後紀』に記されているという。主に大和高原で作られるお茶は品質のいい煎茶。

金魚

大和郡山市では金魚の養魚が盛んに行われている。古く江戸時代の後半から郡山藩内で観賞用の金魚に関心が持たれ、その養魚の方法が研究され始めていた。やがて、明治時代になると元藩士が村人に養魚法を指導し郡山の産業として発展した。元々郡山の周辺には多くの溜池が存

在しており、また、休んだ水田の活用として、農村でも養魚を盛んに行った。この金魚は各地の祭りや縁日の夜店で金魚すくいに提供されている。その他観賞用の金魚の養魚も盛んである。毎年

夏に、大和郡山市では全国金魚すくい選手権大会が開催され賑わっている。

茶粥

奈良名物として知られる茶粥は鎌倉時代ごろから寺院で食べられていたという。近松門左衛門の浄瑠璃「博多小女郎波枕」の中には「奈良ちやがい」が出てくる。この頃には広く知られるものだったということ。お茶が庶民の飲み物になったのと同じ時期に茶粥が食べられていたことになる。茶の産地ならではの工夫だったのだろう。素朴な味わいとお腹にもたれないことから、朝食に人気がある。

素麺

奈良時代に中国から伝えられた素麺は、中国後漢時代（二五〇～二二〇）の記録にある素餅が原形だという。素餅は素麺や麦縄とも呼ばれ、奈良時代の貴族が食べる特別な一品だった。素麺が作られるのは巻向川と初瀬川が流れる三輪

山のふもと。かつて、巻向川にはいくつもの水車が回り、小麦をひいていた。夏の食品である素麺は極寒期に作られる。今でも寒風に晒される素麺は真冬の風物詩。

柿の葉寿司

吉野や五条、上北山村などに伝わる柿の葉寿司は、紀州から山を越えて運ばれる塩サバを寿司飯に乗せ、柿の葉で包み押し寿司にしたもの。塩サバのうま味と柿の葉の香りがなじんで美味。かつては、各家庭で行事食として作られていた。春の若葉、秋の紅葉を用いた柿の葉寿司は目にも美しい。

吉野葛

秋の七草のひとつである葛の根に蓄えられた澱粉から作られる。江戸時代に広く知られるようになったという。『大和志』には「その色潔白、味甚佳し、因て名品となす」と讃えられる。十二月から四月に収穫した葛の根を砕き、冷水を注いで攪拌する葛回しを重ね、天日で数日、屋内で一ヶ月以上乾燥させると、真っ白で光沢のある製品ができる。葛の根は「葛根湯」という薬品でもあり、薬草園で作られていた。

割箸

うどんなどを食べる割箸は下市町下市で作られていた。伝説として後醍醐天皇が吉野の皇居にいたとき里人が天皇に杉箸を献じたことに始まる。杉箸は特有の色沢と芳香があり、また素朴で高雅な味わいから愛用された。後に公家や寺院にも使用され、やがて一般にも使用されるようになった。

陀羅尼助

大峯登山者の土産物としてよく知られる陀羅尼助は、役小角がその製法を熟知していて、吉野山・洞川に伝えたといわれている。陀羅尼助は仏教用語からきており、僧侶が陀羅尼を学ぶ時に往々睡眠を催すので、その時キハダの樹皮を煎じて飲むと、強い苦味に目が覚めたというところから、名付けられたという。原料ははぎとったキハダ樹皮を日光で乾燥して、押切にて切り、釜中で煮たものであったという。今日では大峯山系のキハダも少なくなつたが、かつては豊富にあったという。腹痛に効果があるというが、その他、万病に効くといわれる。